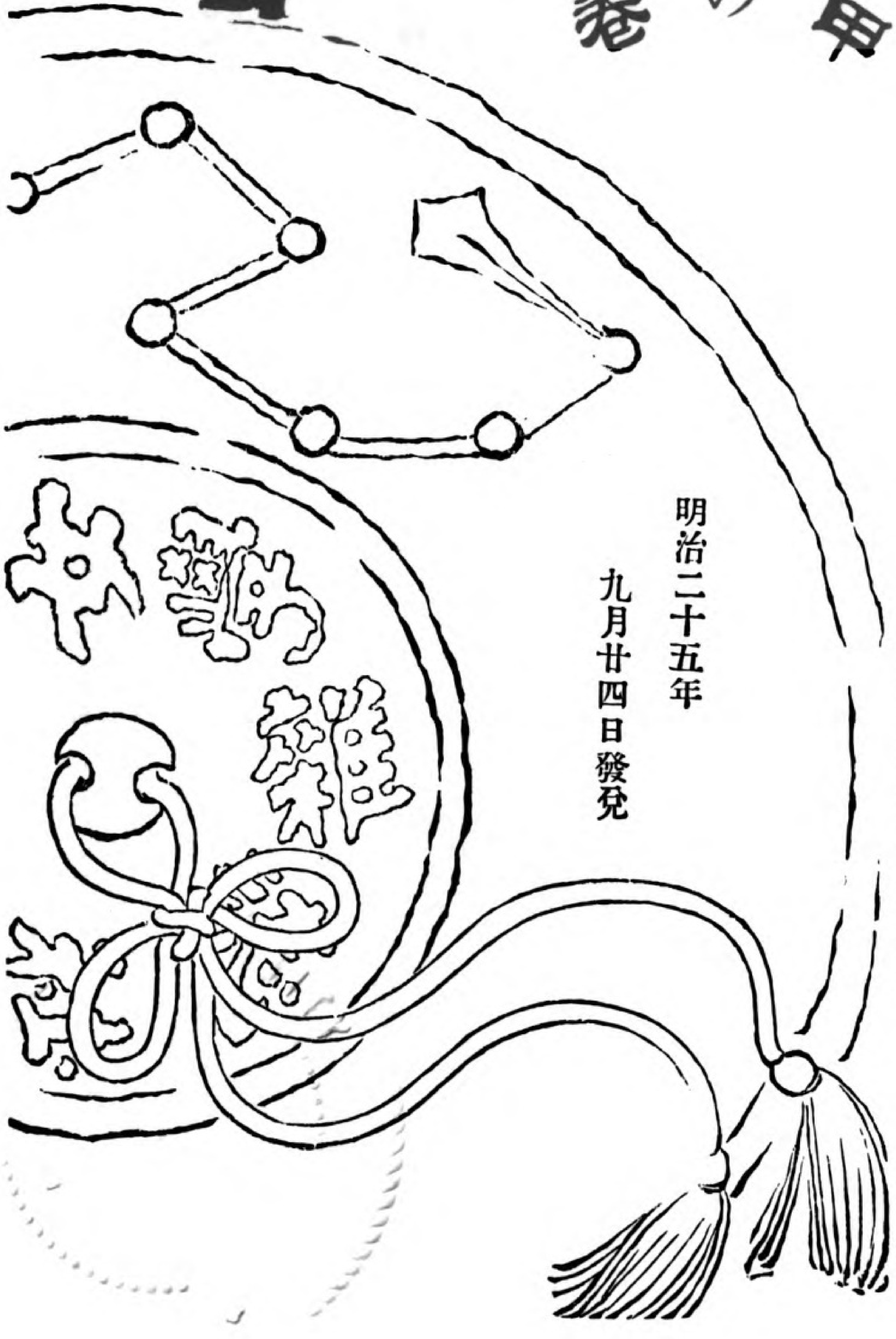
女學雜誌

第三百二十八號

甲の巻



明治二十五年九月廿四日發兌

注意

社説 **主動者之至誠** は事業の成敗、流化の清濁、一に責を主動者に歸す可きを論じ大ひに修道者の警戒を促す **松平熊本縣知事** は曲阿追従の士なりと論斷して中央政府地方の蒼生を安んせんと欲せば如此き不良二千石を罷廢すべしと直論す **文覺上人本領** は國民新聞の文覺論を破し此偉人物の一生に三段階あるとを明にして其の戀愛に靈變するの妙趣を穿ち津々たる同情の筆に痛罵痛慨の氣を呵せしめたる天知子得意の文也 **心機妙變を論ず** は天知子と同旨異方の點に眼を着け尤とも精緻孅妙なる批評を以て文覺上人一聖轉の心理を解剖す透谷氏獨得の調 **横井小楠**の評及び**傳道師**に對する一言は短なりと雖ども注目を惹くの價値あらんか **早稲田文學**の無韻非歌の論に對し磯貝雲峯子の精密なる批評の長文章を掲載し **附錄**教育學の講義 **同**女學雜誌惣目錄等あり。

Sept. 1892

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 328. SEPTEMBER 24th. 1892.

EDITORIAL:—The Faithful Leader. The Governor of Matsudaira and that of Kumamoto.

MISCELLANEOUS:—To the Leaders of Young Men, Gems from Sonnets. A Great Spiritual Reform Psychologycally Viewed. The Mission of Mongakushonin.

LEADING ARTICLES:—

NOVEL:—"Natsukusa."

CRITICAL NOTES: Yokoi Shōnan. The Evangelist.

FRAGMENTS:—

HERE AND THERE:—

SUPPLEMENT. GENERAL CONTENTS.

本號（第三百廿八號）目次

○社說　主動者の至誠○松平熊本縣知事

○雜錄　靑年改革家に告ぐ（山月子）○片珠

○論說　心機妙變を論ず（透谷子）。○文覺上人の本領（天知子）

○小說　夏草（無名氏）

○批評　横井小楠　○家庭雜誌　○傳道師　○早稻田文學の無韻非歌論を讀

○摘要

○片々

○附錄　惣目錄

前週（第三百廿七號）赤表

●社說　宣教師派各女學校に一策を献ず

●論說　何故に余は禁酒主義を執る乎（ウイラード）

●小說　正直もの丶子澤山（花園女史）

●文藝　歌の誠及池袋社中（紫花山人）○案山子の舍歌評

●雜錄　沙翁曲中の戀人○何故グラッドストンは健康なりや○茶話會（子供にきらわれる法。すかれる法○女の謹み）（山月子）

●家政　育兒談○家庭の養鷄（巢鷄の撰擇法○抱卵法及び巢鷄の取扱○こがれの砂二つ三つ（手輕西洋菓子の法）○生魚の腐りを止る法○汚き水を淸くする法○毒虫に刺れたる時の藥○橪味噌の酸味を止むる法

●批評　國母論。乳肉新報。

●摘要

●女報

前々週（第三百廿七號）白表

●社說　日本風及西洋風

●史傳　二宮先生報德訓

●小說　夏草（第四回）無名氏

●雜錄　獨嘯偶錄（幼な兒、知らず。懺悔）。三日幻境（透谷）

●論說　坐禪の辨（天知子）

●批評　開國始末の書法に關する疑問。排曲學論。日本博士全傳。明治政史。勿。

●摘要　眞正の善後策は議會解散にあり。死。紙幣流通高。軍費及教育費。靑年記者必讀の書。昨年中英米新版書

●片々

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第三百廿八號　明治二十五年九月二十四日

社説

主動者之至誠

嘗て心友某氏と談じ、相同もに嗟歎して曰く、已ぬる哉、人世の事、多くは皆な虚僞なり、忙々として日夜に爲す所ろの人の事業、多くは皆な假空なり、紅顔老ひ、白髮枯れ、日月朝夕に廻轉するも、天の下に新らしきとあるは鮮なし、嗚呼噫、如此くして、人世何の日にか進み、邦家何の日にか改まらんや。夫れ、滔々たる蒼生に求むるに、悉とく有爲の德を以てすると能はず、追從の徒多くして主動の人稀れなり。而して、稀に在るの主動者多くは、忠誠ならず。反つて濁流を世波に引き、万衆をして之に溺惑せしむ。近年、幾多の事業隆起せざりしにはあらず、而も其末多くは失敗し、累々たる屍を到る處に散し、紛々たる臭氣を四風に流す所以の者は、職として、其主動者の忠誠ならざるに由る。吾黨退伏修養する十數年、たとひ朝露の生命を草頭三尺の上に掛る僅々なりとも、冀はくは山を出るの日を急ぐ可らず、渾身至誠を以て滿ちずんば、同胞と謀りて能く何事をか成さん、と。

余、頃日微恙あり、孤枕の上に首を垂れて、今昔の感大方ならず、抑そも余、爾來何程の進歩か爲せし。仰ひで皇天を拜し、伏して吾日本國同胞の万衆を懷ふ。兄弟日々に心相背き、官民年々恨を增す。揚言して帝室の御事を喋々すと雖ども、明治の平野二郎何處にある。言を愛國に假りて、切りに慷慨すと雖ども、其郷黨親戚をすら愛せざるもの比々是れ也。嗚呼此の多艱多難の時に際しては、細德、余の如きものも亦た何等の用あらずとす可らず。此に於て、自ら省み、益々修養の足らざるを感じ、悱憤發勵の氣尋常ならず。

然れども、讀者、修養を以て無爲寂滅の事と誤認する勿れ。大隱は市に居し、詩仙は都に住す。眞誠修養の士は、日夜の雜務を辭する者にあらざる也。又た自信固からざるの方面に向つて山を出でず、自から廣告して忙々然事務を受負ふとあらず。但だ、時世信じ、世人信じ、天、われに任ずべしと信じて與ふる所の命職を奉戴し、至誠を盡して之を實行するある

のみ。如此くして、日々に修養し、艱難に筋骨を練り、辛苦に膽胸を固めて、以て異日の大召集を待つもの也。吾が報報二宮先生は曰く、

人は悟道治心の修行などに暇を費さんよりは一善事なりとも身に行ふを尊とします善心發らば速かに是を事業に表はす可し親ある者は親を養育す可し子弟ある者は子弟を教育す可し飢人を見て哀れと思はゞ速やかに食を與ふ可し惡き事したり己れ過てりと心付くとも改めざれば詮なし飢人を見て哀と思ふとも食を與へざれば功なし我が道は至誠と實行のみ。

先生の言もとより激に過ぐるものありと雖ども、吾黨が朝夕に服膺す可きものは即はち是也。吾黨は深く自修鍛練を重んず、然れども之が爲めに無爲寂藏し、寒鳥枯木と一般ならんとするものを極めて不可とす。

文部省、徳育勅諭の寫文を全國に配布し、盛に徳育を重んず可きとを主張す。而して、徳育果して幾干か實行せられたる。内閣數度たび變轉して、其都度治國の經綸、施政の方針を訓示し、而して其主旨果して幾干か實行せられたる。啻に、内閣と、文部省とのみならんや。小にしては、吾黨が親しく知り、亦近く關係する所ろの諸事業の如き、其主動者の精神大概ね貫徹せず、中心の經綸空しく徒法に屬し了るもの甚はだ多し。之れ何の故ぞや。

此時に當り、主動者たらんものは、早く他を責むるとを止めて、先づ深く自ら責ずんばある可らず。主動者にして、至誠と實行とを兼んには、其神、何ものにか徹透せざる可き。一度び試みて倘可ならずば、之を再たびす可し。再たびして倘可ならすば、之を三たびすべし。三たび倘ほ可ならずば、之を十度びす可し。十度び未だ可ならすば之を百度びす可し。百度を再三にして遂に千度びに至るも、透徹せしめずんば置ずと。凡そ此の胸襟なくんば、暫らくにして煩悶狂苦し、他を罵責して憤死するに至らん耳。左れど、亦た之を數度びすと云ひて、緩漫鹵莽に流るゝと勿れ。苟くも斷乎として決せば、至誠に滿ち充つるの事は必らずしも難からじ。人は生れ乍らにして、至誠に造られ、天地は自からにして、至誠の元氣に滿々たるに非ずや。

以上は、「主動者」の地歩よりして論を立てたり。然れども、

或る見解に隨ひて、人は銘々皆な一個の主動者たることを覺悟せずんばある可らず。夫れ天の人を世に降すは、喩へば石を池中に投入するが如し。落下投入の地、之が爲めに一個の中心となり、之より四方に波及影響す。左れば、人の世に生るる、各人皆な獨自一己の天職を負ひ、其異なりたる天職を行顯發揚するの點よりして考ふれば人は銘々に於て一個の主動者たる也。故に万人各自須からく主動者至誠の覺悟を存す可し、自ら卑下して、追從追流の低きに就く可らざる也。蕉翁句あり、古池や蛙飛込む水の音と。個人天職を負ふて濁世の中に飛入す、主動者として何等かの反響を發せしめずんばある可らざる也。

松平熊本縣知事

松平熊本縣知事の如きは、曲阿追從の士なる可し。其爲す所ろ、時流に隨つて變じ、前后に一貫せる節操を存せず。中央政府の主動者にして、知事を任使するものは、深く此流の人物に注意する所ろなかる可らず。然らざれば、陛下の仁意意外に曲折し、地方の蒼生をして、塗炭に苦しましむることある可き也。

凡そ、末流の徒が、主動者の眞意を誤解し易きは、古今恒に然り。何んぞ特更らに、異主義の人のみを咎む可けん。近年偏僻せる德育敎を隆んに主張するが故に、遂に妻を殺して母の病を治せんとするものもありき。されど、此一事の誤解によりて、直ちに彼の德育敎全躰を非難するは、喩へば、日本帋上の某氏が、長崎に起りたる尤も惡むべきの獸罪を以て、直ちに基督敎の博愛主義を難ずるが如し。如此き爭論は、馬丁野人の言ふ可きことにて、經世の達識あるものは、深く愼しむべきの辭柄なりとす。但だ、末流追從の徒は、尤とも主動者の眞意を誤解し易きが故に、主動者たらんものは、深く一言一行に愼しみ、輕々しく矯激の躰を爲さず、謹直細心にして、反響の眞意に違はざらんことを希圖す可し。

左れど、松平熊本縣知事の如き輩あらん限りは、主動者何如に謹直細心すとも、遂に彼をして中正の道より違はしめざること能はず、何んとなれば、彼は無主義無節操にして、たゞ曲阿追從することを主旨とすれば也。

基督教の是非は公論に任す、堂々之を駁するものは、他日必らず吾黨の友たるべし、吾黨は深く此流諤々の士を愛重す。但だ、彼の賛成するが如く、反對するが如く、敵の如く、味方の如く、只だ時の都合に隨ひて、飄々汎々たる水月海鼠一流の輕薄人物に至りては、吾黨之を毫末も假すと能はず。一個人としては深く之を憫れむ、然れども公論の上に於ては、毫頭も之を容すと能はず。

松平氏は宮城縣に於て、彼の新島襄氏と計りて、東華學校を設立したる發起人なり。東華學校の基督教主義たるとは、天下に明けし。然るに、彼が、國權黨の巢窟たる熊本縣に入りてよりは、翻然として基督教の迫害者となれり。信據す可き人より送り來れる左の通信を讀む可し、

松平熊本縣知事　國權黨一派の歡心を買ふて縣治をなさんとすることは明なる。事實なるが嘗て縣下各郡を巡回し教員は宗教(耶蘇教)を信ずべからず信ずるものは處分するなりと演説してより縣下教育上干渉甚しく左の一例の如きは殘酷の甚しきものなり。

七月廿五日熊本縣山鹿高等小學校に於て佐久間敬彥、高木秀雄、今井美完、高木友次郎(四年生)四氏は基督教の經典を研究せりとて警察官は之を校長赤星氏に密告せり、校長は同校生徒より耶蘇教研究者出來しては知事郡長に申譯なしとて四氏を叱責强迫の末、其研究を已めずんば退校を命ずべし三日の中に返答すべしと四少年は苦心焦慮寢食を忘れ、佐久間は之を其父、佐久間英次郎氏に談じたりしに父曰く教員に答へよ卿等の言葉有り難し、然れども天賦上、憲法上、吾人の有する自由は之を曲ぐる能はずと

廿六日少年之を教員星子某に決答す然るに教員は之を駁擊して曰く小學生徒は國民にあらず故に憲法上信教の自由を有せずと

八月十八日、休暇もすみて開校となるや校長赤星爲巳氏は教員星子と生徒森田を佐久間等に遣はし諭して曰く基督教を研究するは差支なきも校長教員の命に逆ふは甚だ以て不都合也、故に郡長より退校を命ぜざるに先ちて退校する方よろしからんと然れども佐久間氏は憲法は照然として上にありとて之を謝絶せり

廿二日、教員淵上某、佐久間氏を呼び出し、學校より差止ろにも關せず之を研究せしめんとする汝の父の意を尋問し來れと父佐久間氏翌日教員に會して其妄言の理由を詰れば周章狼狽して曰く憲法上學則上、之を禁ぜしにあらず老婆心より注意せしのみと

廿七日、遂に佐久間氏を退校せしめ將に其他に及ばんとす、其趣旨は基督教は勅語に違反する者にして、アブラハム其子を神に獻ぜる如き是勅語に反するの證也と、佐久間は品行方正、學術優等、此頃聖書研究の爲、一點を減ぜられたるのみ此校從來此事なく松平知事、基督教禁止の演說以來此事となり而して以上の事皆な郡役所縣廳を歷訪して後談じたる事なると云ふ(以上は國民新聞の通信にかゝる)

此れ一小事に似て、實は大事件なり。文部中心の人大ひに警戒する所ろなくんば、四方の俗吏中央の眞意を誤解して、今后いよ〱荼毒を流すに至らん。もし夫れ、基督教の爲に言はゞ、如此き小迫害は何等痛痒を感ぜしむ可きものにもあらず、苟くも眞實に主義を守るものは、かゝる小迫害によりて何の不便を感ぜんや、思ふに彼等は謳歌感謝して、彌よ自ら重んずるなる可し。吾黨は只だ地方に如此き不具二千石あるを蒼生の爲に遺憾とするもの也。

雜録

青年改革家に告ぐ

山月子

パウロコリント人に書を贈りて曰く『假令われ諸人の言および天使の言を語るとも若し愛なくば鳴銅や響鈸の如し』と、嗚呼此確信富愛の心より出でし生氣鬱勃紙面血流れ涙滴るの句をして妄りに用ひしむると勿れ、ゲーテ曰く『生命は愛なり』と、吾人若し新たなる生命なくば、是れ愛なきなり、吾人若し失望せば、是れ愛足らざるなり、既に愛の無窮を信じ、既に愛に敵なきを信ず、何れの處にか失望生ぜん、慷慨痛憤の中、猶閑日月、清風あり、艱苦悲哀の中、猶喜樂、平和あり、永遠を樂みて、而も迂濶氣樂に流れず、能く目前に世界に泣き憤る、天地を大觀して、而も冷淡なる理窟好みに陷らず、能く一人の爲めに心を盡す、愛を味ふ者こそ、眞正の傳道者、教育者、改革者といふべきなれ、

讀君　幸に味ふの文字を輕視すると勿れ、蓋し人世の艱難悲哀は、能く吾人を鍛練して、吾人が耳に聽きたる愛をして直に心に味はしむ、艱難の山、悲哀の川を越へずして、誰か愛の眞味を知らん、たゞ悲むべきは、實際の社會に出で、此鍛錬を經て、益々進むべきの時に際して、鋭氣を挫折し、世事意の如くならずと歎ずる者にあり、敢て問ふ、意の如くならずとは何の意ぞ、我意か、天意か、學窓に空想して、我意を立てんと欲す、實際立たざるは元來明白、何ぞ驚くに足らんや、然らば天意か、道を確信する者、固より天意に順はざるべからず、天意昭々何れの處にか行はれざらん、即ち何の鋭氣を挫くとかあらん、希望滿々、困難愈々甚しうして精神愈々振ふべきなり、十九世紀日本の改革家たる者、漢の伏波將軍馬援に笑はるべからず。

片珠

かばかりの事は浮世の習ひぞと
　ゆるす心のはてぞかなしき

さなきだにさびしきものをひく〳〵に
　秋にちかくもなりにける哉

有といへば有とや人の思ふらむ
　呼ば答ふる人彦の聲

無しといへば無とや人の思ふらむ
　よべば答ふる山彦の聲

三度たく飯さへこはしやはらかし
　思ふまゝにはならぬ世の中

論説

心機妙變を論ず

透谷子

哲學必らずしも人生の秘奥を徹貫せず何ぞ況んや善悪正邪の俗論をや。秘奥の潜むところ、幽邃なる道眼の觀識を待ちて無言の冥契を以て或は看破し得るところもあるべし、然れども我は信ぜず何者と雖この「秘奥」の淵に臨みて其至奧に沈める實珠を探り得んとは。

むかし文覺と稱する一傲客しばしが程この俗界を騒がせたり。彼は凡ての預言者的人物の如く生涯眞知己を得ることなく、傲逸不遜磊落奇偉の一人物として幾百年の後までも人に謳はれながら、一の批評家ありて其至眞を看破し思想界に紹介するものもなく今日に及びぬ。時なるかな今年の文學界漸く森嚴になりて、幾多思想上の英雄墳墓を出て中空に濶歩する好時機と共に渠も亦た高峻なる批評家天知子の威筆に捕はれて明治の思想界に紹介せられたり。

天知君は文覺の知己なり、我は天知君をして文覺と手を携へて遊ばしむるを樂しむ、暗中禪坐する時彼の怪僧天知君を訪らひ來て豪談一夜遂に君を起して彼の木僧を世に顯はさしむるに至りたるを羨まず。わが所望は一あり、渠が知己としてにあらず、渠が朋友としてにあらず、渠が裡面の傍觀者として、渠の心機一轉の摸樣を論ずるの榮を得む。

蓮池に臨みて蓮蕾の破るゝを見るは人の難しとするところなり。蓮華何の精あるかを知らず、俗物の見るを厭ふて幾多の見物人を失望せしむること多しと聞く。曉鴉に先ちて寢床を出で池頭に立ちて蓮女第一回の新粧を拜せんとするの志あるもの既に俗物を以て指目するに忍びず、然れども佳人何すれぞ無情なる、往々にして是等の風流客を追ひ回へすことあるは。人間界の心池の中に靈活なる動物の、心機妙轉の瞬時の變化も、或は蓮華開發に似たるところあり。

風靜かに氣沈み萬籟默寂たるの時に、急卒一響神裝を凝らして眼前に亢立するは遊仙なり、何の促がすところなく、何の襲ふところなく、悠然泥上に佇立する花蕾の一瞬時に化躰して神韻高趣の佳人となるは驚奇なり、然り驚奇なり、極めて普通なる驚奇なり、もし花なく變化なきの國あらば、之を絶代の奇事と曰はむ。絶代の奇事にして奇事ならざるもの自然の妙力が世眼に慣れて悟性を鈍くしたるの結果とや言はむ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

人間の心機に關して深く觀察する時は、この普通なる驚奇の變化最も多く、各人の歴史に存するを見る。然りこの變化の尤も多くして尤も隱れ、尤も急にして尤も不可見のもの、他の自然界の物に比すべくもあらざるものあるは、人生の靈活を信ずるもの丶苟くも首肯せざるはなきところなり。惡を惡なりとし善を善なりとし。不德を不德とし。非行を非行とするは俗眼だも過つことなきなり、但夫れ惡の外被に蔽はれたる至善あり善の皮肉に包まれたる至惡あるを看破するは古來哲士の爲難しとするところ、凡俗の容易に企つる能ざる難事なり。もし夫れ惡の善に變じ、善の惡に轉じ、惡の外被に隱れたる至善の躍り出で、善の皮肉に藏れたる至惡の跳ね起るが如き電光一閃の妙變に至りては極めて趣致あるところ極めて觀易からざるところ、達士も往々この境に惑ふ。

人間の無爲は極めて暗黒なるところと極めて照明なるところとあり。その無心の域に入れりとすべきは生涯の中に幾日もあらず。誰か能く快樂と苦痛の羈束を脱離し得たるものぞ。誰か能く淨不淨の苦闘を竟極し得たるものぞ。誰か能く眞に是非曲直の鐵鎖を断離し得たるものぞ。唯だ夫れ人間に賢愚あり、善惡あり、聖汚あるは、その暗黒と照明との時間の「長さ」を指すべきのみ。いかに公明正大を誇負する人ありとも我は之を諾する能はず、畢竟するにその所謂公明なる所以のものは、暗黒の「影」の比較的に薄きに過ぎず、照明なる時間の比較的に長きに過ぎず、眞の大知、大能、大聖に至りては我は之を人間界に索むるの愚を學ぶ能はず。然り、大知、大能、大聖は人間界に庶幾すべからず、然れども是を以て人間の靈活を卑うするところはなきなり、人間と呼べる一塊物(A Peace of Work)を平穩靜着なるものとする時は何の妙觀あるを知らず、善あり惡あり、何等思議すべからざるところありて始めて其本性を識得するを得なり、善鬼惡鬼美鬼醜鬼、人間の心地に混交し亂戰するを以て始めて人間あるもの丶他の動物と異なる所を見るべし。

神の如き性人の中にあり、人の如き性人の中にあり、此二者は常久の戰士なり、九竅の中にこの戰士なければ枯衰して人の生や危ふからむ。神の如き性を有つこと多ければ、戰ひは人の如き性を倒すまでは休まじ、休むも一時にして程經れば更に戰はざる能はず。人の如き性を有つこと多ければ終身惘

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

くゝとして煩ふ所なく想ふ所なく憂ふる所なからむ。この兩性の相鬪ふ時に精神活きて長梯を登るの勇氣あり、鬪ふこと愈多くして愈激奮し、その最後に全く疲癈して萬事を遺る、この時こそ、惡より善に轉じ、善より惡に轉ずるなれ、この疲癈して昏睡するが如き間に。

人の一生を水晶の如く透明なるものと思惟するは非なり、行ひに於ては或は完然に幾きものあらむ、心に於ては誰か缺然たらざるものあらむ。人は到底絶對的に善なるものとなると能はず、然れども或限りある「時」の間に於て極めて高大なりと信ずる事は出來ざるにあらず、其限りある時間の長短は一問題なり、われは思ふ其極めて短かきは石火の消えぬ間にして長きも流星の尾に過ぎじ。虚無を重んじ無爲を尙ぶも畢竟この理に外ならず、施爲多く思想豐かにして而して高遠なること能はざるは寧ろ彼の施爲なく思想なくして石火中の大頓悟を樂しむに加かじとすらむ。

文覺の袈裟に對するや如何なる愛情を有ちしやを知らず、然れども世間彼を見る如き荒逸なる愛情にてはあらざりしなるべし。當時夫婦間の關係を推するに德川氏時代の如く嚴格なるべきものにあらず、袈裟の如き堅貞の烈女實際にありしものなりや否やを知らず、常磐の如き巴の如き節操の甚だ堅からざる女人多き時代にありて袈裟御前なるもの實際世にありしか或は疑ひを挿むの餘地なきにあらず。然れども凡てのドラマチカルの事蹟を抹殺し去りても文覺が其妄愛に陷りし對手を害せし事は事實なるべし。文覺が世に傳說する如き驕暴なるものにあらずとするも、少なくとも癡迷惑溺の壯年たりしことは許諾せざるべからず。

渠は油地獄の主人公の如く癡愚無明なりしものなるか。余は、しかく信ずること能はず。彼の文彼の識世間の道法を辨ぜざるものとは認め難し。然れども渠は迷溺するを免かれざりしあるべし、彼の本地は世間の道法にあらず、世間の快樂にあらず、世間の功利にあらず、進取にあらず退守にあらず、全然一個の椀白むすこたりしなるべく、何物にか迷ひ何物にか溺るゝにあらざれば遂に一轉するの機會は非ざりしなり。渠は凡てのものを蔑視したるあるべし、淨海も渠を怖れしめず、政權も渠を懸念せしめず、己れの本心も渠を躊躇せしむるところなく激發暴進鐵欄の以て繫縛する者あるに至るまでは停

駐するところを知らざるなり。

渠は悪を悪とするを知る、然れども悪の悪なるが故に自ら制止することは能はず、能はざるに非ず、するの意志を有せざるなり。善の善なることを知る、然れども善の善たるを知りて之を施すことは能はず、能はざるに非ず、施すの念を有たざるなり。彼の一身は一側より言へば、わんぱくなり、他の一側より見れば頑執なり。人の婦なることを知りて之を姦せんとす元より非道なり、然れども彼は非道を世人の嫌悪する意味に於ての非道とせず。人を己れの慾情の爲に殺害するの悖虐なるを知る、然れども悖虐を悖虐とする所以は極めて冷淡なる意味に於てなり。故に彼はこの大悪を犯さんとする時に左轉右眄せず、白刃を睡客に加ふるの時に於てすら彼はなほ大悪の大悪たるを曉知せざるなり。

斯の如くに冷絶なる傲漢をして曇天の俄然として開け皎々たる玉女天涯にひかり出でたるが如くならしめたる絶妙の變化はいかにして來りたるか。殺人の大悪彼を驚懼せしめ醒覺せしめしか。然らず。彼は始めより畏懼を知らず。彼に妙變を與へたるもの別に存するあり少しく是を言なむ。

彼はこの際に於て天地の至眞を感ぜし事其一なり。凡てのものを蔑視したる彼は今女性の眞美を感得せり、血肉あるの女性は血肉の美を示せども天地の至妙を示すものにあらず、始め貞操を以て辭せしものも、人間を嘲罵する彼の心絃には觸れざりしを、この際に於て豁然悟發して人間に至眞の存するあるを曉らしめたり。

彼はこの際に於て己れの意中物を殘害すると同時に己れの迷夢をも撃破し了れり。彼の惑溺は、袈裟ありて然るにあらざりしも、この袈裟の横死は彼が一生の惑溺を醫治したり。意中物は己れの極致なり、己れの極致を殺したる時に、いかで己れの過去を存することを得む。彼は極致と共に死したり、而して他の極致を以て更生するまでの間は所謂無心無知の境なり、激奮猛奔して而して中奥に眠熟するが如き境なり、この境を過ぐるは心機一轉に缺くべからず、而してこの境は石火なり流星なり、數秒時間なり。この數秒時間の後に他の極致は歩を進めて彼の中に入る、しばらく混亂したる後に彼は新生の極致を得て全く向前の生命と異なるものとなるなり。

彼はこの際に於て天地の實を覺知せり。「死」彼に於て何の恐るゝところなく、生彼に於て何の意味あるかを知らしめず、茫々たる天地、有にもなく無にもなきに似たる有様にありしものが始めて「死」といふ實を見たり。死は永遠の死にして再見の機あらざるべき實を知りたり。無常彼に迫りて、無常の實を示し、離苦彼を圍みて離苦の實を表はし、戀愛その僞裝を脱して戀愛の實を顯はし、痴情その實躰を現じ、大惡その眞狀を露はし、彼をして棘然として顛倒せしめ、然る後に彼をして始めて己れの存立の實なると天地萬有の實なるとを覺知せしめたり。而して彼をして天地神明に對して極めて眞面目なるものとならしめたり。

彼はこの際に於て戀愛の至道と妄愛の不義とを悟れり。曩に愛慕したるもの眞の愛慕にあらず、動物的慾愛に過るところあらざりし。然れども事の茲に至りて、始めて妄執の妄執たるを達破し、妄愛の纒綿したるを頓脱し、戀愛の方向一轉して皮膚の愛慕を轉じて內部精神の美に對する高砂なる愛慕を興發せり。この愛慕は一の目的物に聚りて、而して四散せり、四散せるもの再た聚りて或一物の上に凝れり、彼の以後の生涯是を證するを見るべし。

最後に彼は此際に於て佛智を得たり。彼は無慚無愧無苦無憂にして百煩惱の繁擁するところとなりて自ら知ること能はざりしなり。然るに發露刀一たび彼の心機を斷截するや、彼は自ら依怙するところを喪ひたり、佛智はこの一瞬間に彼の中に入り、彼をして照明の心鏡に對せしめ、慚愧苦憂輾轉煩悶せしめ、然る後に自己を寄すところを知らしめたり。

凡そ傲逸彼の如きは、亂世にありて一佛徒として終ること能はざるところあり、然るに彼をして遂に劍鎗に杖かずして、經典に倚らしめたるもの、抑いかなる鬼物の神力ならむ。他ならず、この一瞬時の發露刀なり、心機妙變なり。剛健彼の如く、執着彼の如く、驕慢彼の如く、血性彼の如きものをして、志の壯偉ある事は全盛の平家を倒して孤島瓢落の人を起す程にありて而して胸中一物の希ふところなく、單だ一寺の建立を願欲せしむるに過ぎざりしもの抑も奈何の故ある。曰く彼時の變化なり。熱烈の舌一世を罵り勇猛の氣英雄を呑み。豪快天地を嘲るが如き擧動を爲しながら、別に一片の眞率無慾なるところ、專念回向するところ、瞑目靜思する處ろ、殆數個の人あ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

るが如き觀あるもの何ぞや。曰く彼時の發心なり、彼時の心機妙變なり。彼時に得たるものが深く胸奥に印して抹除すること能はざればなり。噫この、ある意味に於ての荒法師が筐中常に彼可憐の貞女の遺魂を納めて、その重荷を取り去るを得ざりしと、懸瀑に難行して胸中の苦熱銷し難き痛惱とは豈生悟りの聖僧の能く味ふを得るところならんや。

冷淡にして熱血ある好漢遂に半悟の人とならず、能く自家の弱性を暴露し、罪業を懺悔せり。然り彼の一生は罪業の一生にあらずして懺悔の一生なり、彼を以て改革家なりと評する如きは蛇尾を見て蛇頭を見ざるの論なり。

文覺が袈裟を害したるは實に彼の心機を開發したるものなり、蓮花蕾を破りて玉女泥中に現はれたるは實にこの晨なり、至善の至惡を仆したるもこの朝あり、無漏の有漏に勝ちたるも、光明の無明を破りたるも、神性人性を撃碎したるも皆この時に於てありしなり、而して其時間は一閃電の間に過ぎず、人終に戰はずして勝つ能はざるか、仆れずして起る能はざるか、われは文覺の爲に悲しむ、われは彼の發機を觀じて彼の爲に且つ泣き且つ喜ぶ、彼をして斯の如き大毒刄の下に大發心を得せしめたる神意果して如何。天知子の女學生に載せし「怪しき木像」我眼前に往來して遂に我をして未熟の文を出すに至らしめぬ。アーノルドの「あづま」世に出るの時は近しと聞く英國の詩宗が文覺を觀るの眼光いかんは讀者と共に刮目して待つべし。

文覺上人の本領

病床にて　天知子

今年は文覺の當り年なり、日本粹のアーノルド氏は碧眼を拭ふて太西洋の東岸、霧深き眼に之れを紹介し。蓬萊曲情海の達士透谷子は爰に鐵骨高顴の筆硯に此上人を研がんとする由。民友流の筆法を運うしたる境野怡雲氏は、此上人を革命的偉人として形而下に本領を堅めて論ずるに至る。嚮きには女學生夏期號外誌上、怪しき木像に物言はして吾が暗光子に上人を想はしめぬ。而して余は今吾が暗光子の腦髓に親しみて此上人の本領を確かめ、其物質的誤解の寃を雪がんと病ながらの口調を勵まし、熱を筆に含ましむるとさなりき。

果敢なしや、肉の眼は鷹と輝やけど心の眼は海月の如き世の中、人は麪包のみにて活き道は淺く速了せらる。偖は人間も物一片に論ぜられ戀愛も色情と混ずるものある今日の人ごゝろ、經濟の奥義は金錢と心得、處世の目的は名利と呑込み、事業とは人目に燦然たるものと信じ、偉人とは大きく視ゆる仕事人足と飽まで思ひ込みたる幼なき殿原多きも無理には非ず、先きにはシーザアの臭骸を恥かしげもなく英雄經として、

崇拜的唯一の人物かの如くに說きたる人さへ憐れなるに、今又人情の靈界に一大趣味ある此文覺をして、心おくも物質的革命家の人籍に記入さるゝの遺憾を悲しむ、詩人の眼鏡に照らしてこそ太牢の滋味もある、東洋史家社會政治的の望遠鏡に觀察さるゝの淡味なるを本意とせんや、太湖の奇石は鑿持つ石工に觀せたくなし、櫟社の大樹は繩墨の木匠に鑑定せしむるを欲せんや。

法と武と陰現出沒相戰ふの歷史ほど面白き舞臺は非ず、而して此二勇が鎬を削る火花に打たれて、發作せる合の子のスピリットほど興味深き人は非ず。法は僧侶の武器なり武は武士の打物なり、而して此二者が互ひに政權の寵兒たらんとして屢々衝突し、各々猖獗を恣にして其劍戟と其神輿神木とは絕えず京師に相爭ふて朝臣文弱の膽を呑み、武士終に勝利の旗を鳴らして朝臣を賣り政權を握り、而して武士が此全勝の衢を進行する時、其榮を貪らんとして終に紅白の二旗に大分裂を生じ、此流末の大競爭は日本歷史上に源平の大舞臺を演ぜしむるに至りたり。故に源平の戰史を繙くものは、薄弱の朝臣が僧徒の暴威防がんとして武人に斧を與え過ぎたる法と武との爭ひに結果せるとを知らずんば非ず、而して又此舞臺の演者中、時に法と武の鎚を以て鑄冶されたる人物あるを見ずんば非ず。當時上流人種の腦髓中には往々此法と武の中間一種の新思想を開かんとする者多し、殊に多血多感の腦充血を冷さんとする一種の氷嚢として最も價値ある如く信ぜしめぬ、薙髮を急ぎて隱政を專らにし給ふ法皇の如き、賴政法師の如き通憲の信西の如き、西光の如き康信入道の如き、季光の西阿、行盛、行村、長定の淨圓、法橋圓全の如き及び最明寺法師の如き皆其現象の重もなる者なり、熊谷蓮生、憲淸の西行の如きは此風潮に驅られしに非ずと雖ども、又此思想境に遁がれしに他ならず、當時君臣の嗜好は出家するを素懷遂ぐると通言するに至り、終に政府をして私に剃髮するを禁ずるに至らしむ、以て其思想の傾向を知るに足るべし。

此混亂の思想境に燦爛たる光彩を放つて、二個の大魔星は衆望を代表して搖き出でぬ、天は實に狂ひに狂へる二猛虎を源平原野の中央に降落せしめたりき。一は平家陣中に淨海入道の形骸を假りて人世の肉血を喰はんと現はれ。一は源氏の陣中に文覺上人の形骸を假りて人情の靈氣を吐出さんと現はれ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

たり。而して初めは共に名利の競爭場に雁行の一線を走りて頗る駿足なりき即ち一は大納言に迄至り躊躇して出家の志を發し、一は名譽ある北面武士中に於て榮任と稱すべき將監に到達して深く出家の志を起せり、之れ二虎が蹲踞して天に嘯くの時なりし。而して一は終に其本領に驅られ極めて都合よく肉血社會に大吼して魔風を呼び、武と法と政との墻壁を破壞して併合せしめ、物質界の尊榮を至尊の上に專領して又殘す所あらざりし。而して一は終に其本領の方に首を猛回し、ヒユーマニチーの靈界に大號して狂風を呼び、眼中人なく世なく、情の激するまゝ意の奔るまゝ、人間の本性を少しも障害なく暴露して又遺憾なることなし。斯くの如くして一は社會の上層に高く攀ぢ一は社會の下層に深く潜り入らんとし、全く有形無形の靈肉兩世界の勇將に分れつるなり。此に於て吾人が最も詳明すべき者は、此二虎が咽喉を鳴らして情を舐らんとする時にてあるなり、一は全く野卑汚濁の色情を貪りて其靈を愈々汚し、一は色情より脫變して高尙純潔の戀情に煩悶し以て益々其靈を淸めたり、讀者宜しく此二虎の歷史を射照して深く讀む所なくんば非ず。

余は今斯くして一歩々進め、此社會の下層に隱沒し去りたる一魔星に付て深く觀察の筆鋒を向けんとす。

北面の武士渡邊黨の猛士遠藤武者盛遠の生涯は之れを三變の時代に分つとを得べし。第一は凡俗盛遠の時代にして彼れが「眼に掛りし敵は遁さじ」と大言せし、渡邊黨中に俠客氣象を跋扈せしめ、橋供養に始めて天女の外美に擊たれ、無法なる色情の奴隷と成りて言ふ可らざる暴惡を逞うし、終に袈裟女を誤殺して人世の大悲哀に凋落し、淸盛法師と寢を同ふしたる搖籃中の睡りを覺ますの機に至る。第二は彼れが最も議論を受く可き主眼の生涯にして、第一時代の火性が淚の水を調和して水火相激し、一種の怪物を捻出して詩人が最も目鏡を拭ふべき戀想時代とす、而して彼れが佐殿を激勵して兵を擧げしめたる迄の狂暴文覺の時代之れなり。第三は寂寞僧侶の文覺時代にして、高雄寺建立の素願を遂げて寂居し或は那智の瀑布に荒行を修し或は鎌倉文覺寺に住みて專ら修禪に苦行せし坐禪時代之れなりとす。余は文覺上人の本領を論ぜんとするに、此第二時代を觀察せば足れりとし、此一大樞機を紹介するの榮を敢てせんとす。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

文覺は袈裟女の生出したる上人なりと言はず、然れども戀は文覺を產みたるなり、彼れが木强麁豪の野性を以て人世を木石と思込み、十八年を腕力に握み火の玉の如く轉げ廻りし時、なんぞ知らん我れも亦人間なりしとは。彼れが胸底の弦線は戀想の調を高めて一聲銳く鳴り響けり、彼れは寐耳に水を注がれしかの如く仰天狼狽し、戀人を斬て再び人世の無情に仰天し終に其刄は盛遠の髮と心とを斬拂ふに至り、「露深きあさぢが原に迷ふ身のいとゞ暗路に入るぞ悲しき」。袈裟が此悲哀の遺調は、終に文覺を半狂人たらしめたり。其慨然の餘憤を以て法皇大臣等を罵倒し、仙洞音樂の庭に白刄を掉ひ、流罪さるゝの四人にして吏を嘲り族を罵り、恬として自ら愉快とする如き、奇行奇言至らざる所なく、其行爲や慧星の空中を廻轉するが如きは（境野氏の筆法を假る）其半狂たる所以に他ならず、而して之れを以て「半文錢に抵らんや」と論ずる如きは未だ戀の性質を知らざるなり、文覺は終生淚の人なりしなり、其頭には袈裟女の畫像を本尊佛に合せて常に懸け、戀し、淋し將た悲しき時にも、處女の如く言ふ可らざる熱淚を注ぎて、此一面の畫像に思ひを遣りしなり、此深刻猛俠なる傲骨男子の火性をして、一度戀の失望より多淚の谷に臨ましめば、其急激奔落する勢ひは復止む可きに非ず、煩悶苦叫して熱腸愈々熱し、一種の腦病を惹起して狂激と悲哀の性情を養ふや必せり。斯くして彼の淚は、瞼を出る時非常の抗抵力を以て吸入し、愈々狂激の火の手を猛烈ならしめたり、此猛烈なる狂激は狂ひ廻る猪の如く、當るに任せて蹂躪し見るに任せて其牙に懸けんとす、敢へて敵を撰ぶに遑わらざるなり、之れ併しながら彼れが俠客的渡邊黨中の最も豪俠たりし本性（余が俠客論を參照せよ）に基いする者にして、好しや戀の興奮劑を飮むも、好しや戀は盲目たらしむるも、其本性は依然として指南車たりしなり。此狂激の吹管焰は終に孤身寥々見る影もなき兵衞佐賴朝の鐵石心を熔解して、源家沈淪の最底より其弱きを助けて激勵興起せしめ、同時に驕慢無賴の强權者たる平氏が殲に障りて、其强きを挫かんとの念は一層此力を强めて一身を犧牲に投じて粉骨したりき、何となれば戀は必ず他を愛するの情に迫られて犧牲の人たらしめ、人に與ゆるを以て一世の快樂とし、始めは物を與え終に身を與えずんば止まざる者なればなり、文覺

が此犧牲の決心は勉めて困苦を探ねて常人の爲し得がたき場所に進入するを好ましめぬ、況んや敵を好むの本性は戰國的の謀叛氣を一時の短時間に爆發せしめんとするに於てをや。豈何の暇ありてか主働的革命家として源氏再興を企て、或は公卿の心を攪り或は平氏に親み、口に僞念佛を稱して腹に兵戟を躍らしつゝ、久しく平氏の隙を伺ひ居りしが如きとをせんや、そは未だ戀の洗禮を受けざる盛遠の考へのみ。ましてや清盛沒するを待ちたる如く言ふは愈々寃罪なり、何となれば清盛未だ死せず發熱さへ兆候だもあらざりし時なればなり。ましてや梁川星巖的の人たりと言ふ者あるに至ては愈々益々妄言たるを知るなり、何となれば文覺は手段を巧みに考ゆる如き智能的の頭腦は最も不得手なる點にして、戀と智力とは同時に行はれ難しとの金言に當らずとも、智力甚だ活潑なりと言ふの謬れるを知ればなり。

人は必ず正反對の性質を藏するものなり、文覺は戀に浴みして其藏有せる極めて優しき慈悲の情けを充分に發達せしめぬ其賴朝を想ひ六代御前を懷ひ、共に身命を擲ちて之れを助けしは其義俠と慈悲との本性に發せしものにして、源氏の敵たるに非ず平氏の敵たるに非ず、實に超然主義にして唯人といふ愛的ありしを知りたるに出でしのみ。

文覺を以て飽まで形而下の人として「其終りを全くせしめば彼れ必ず賴朝を凌蔑せん賴朝の權一度其手を去らば彼れ又必ず諸將を制御せん」と論ずる者あり、文覺實に地下に大笑せん。彼れ源家最盛の世となり、天下の總追捕使賴朝が、常に厚遇するにも係らず、彼れは常に世外の寺院に寂居し、名利の燕雀を眼中に嘲笑ふて高く超然として大空に巨鵬の如く飛揚せるなり、其高雄寺に文覺寺に天下の滑稽演劇を厭ひつゝ深く道を修して人を思ひ、悲しき戀の苦胸に煩悶して其犧牲の念は修道の方に一轉し、那智の大瀑に捨身の行と成り坐禪川に饑寒の苦行と成る、高雄寺勸進の如き、天下の革命の如き、決して彼れが畢世の素願には非ざりしなり。ア、當時彼れが胸中を思へば、孤燈の下涙襟を濡ほすを知らず、一匹の蟋蟀の聲や耳に立つらん、一片の木葉の落聲や心に染むらん、然れども俗眼に赫々たる名利の風は彼れの心外に吹きつるなり。唯西行は戀して沈み文覺は戀して動けり、蓋し本性に由るのみ、此二戀者が同時代に足跡を鎌倉に印し、共に賴朝の

知人たりしは、相反映して好對の彩色を見る如し、若し此兩者に光明の側面を見せしめ、靈愛の大洗禮を受けしめば、東洋に愕くべき大傳道者と大詩人を見るならん。

文覺は愛すべき、又穿鑿すべき人物なり、而して願くは人間として愛せよ、物として穿鑿すべからず。彼れをして若し英雄として論ずるとも、其英雄魂は其ジヤスチースとノーブルチスとを賣物には爲さずとの、エマーソンの語を記憶せよ。兼好をして評せしめば、文覺は決して最そう〱しき男子に非ず殊の盃底ある情けの人なりといはん。

稿を脱する病床の上、坐して夜の更けゆく天を眺め、文覺の心情を思ふて悲しく、檐の松虫過去の我れを知りてや鳴く、聲一種の悲調ありて人を想ふと頻りなり、筆を其まゝ

松むしの聲に浮世を見そめけり

小説

夏草

無名氏譯

四回

闇天闇地闇山川。闇路の闇に踏み迷ふ、迷ふ姿は夜目にも著き戀の女神の姿かも。まツくらくら〱眼もくらり、旅行く人の提灯を闇地に誘ふ夜嵐や、さら〱さツと地に落ちて、闇の身にしむ如くなり。うたてやな、心も重し眼も重し、重しと思ふ心の底の重荷は戀の重荷積む、身は嘆息に埋もれて返る木魂にや驚きぬらむ。

戀よ戀。戀に差別のあらばこそ、老も幼けれと唱へども、寂しきものは夏の夜の女心の獨り道。たどり〱て行く程に、空は雲雀の音より白みぬ。

聞けば彼方の杜影に角吹く聲や、犬の聲。もしやと心さわがれて、飛び立ち〱走り寄る、歩みにからむつたかづら、をし分け〱歩み入る、山の奥にぞ鳴く聲のその狩犬の叫びもあやし。こは只事ならじといふ間もあらず、雄熊一聲をどろ

〵。ヒエヽとビナスは飛びひさり、我と吾身の胸を叩いて震ふ兩手を握りしめ、もしや萬一。鶴龜〳〵。夢にもそんな不吉な事が。といふ間もあらず樹影より、仆れし雄熊を覗しに、あゝらをそろしや〳〵。泡だッたる口元には紅を染めて乳に交ぜたる鮮血の腥くぞ見へたりける。エヽ何としたらよかろうぞ。ビナスは心も狂亂の總身をもだへて戰慄をなし、彼方へくるり。此方へくるり、くるり〳〵くる〳〵くるり。元來し道を返ると見れば、左と右へひよろ〳〵〳〵。千鳥足てふ醉漢の、あぶなき歩みを踏みしめて、見れば一村深き草影に、うめくは主の狩犬か。かなたに悲しき姿して、吾身の深傷を舐めつるは、それも戀人の狩犬か。あれ〳〵あそこに犬の聲。あれ〳〵こゝにも犬の聲。犬と犬との聲々に、吾腸はちぎるゝ斗り。主はどうした、どうしなさんしたと、問へども聽けども叫くばかり。一犬悲鳴して一犬の和する姿や尾を垂れて、紅き血潮にまみれつゝ、しほ〳〵として行きければ、ビナスは身も世もないじやくり。胸はこみ上げ〳〵て、もだへ困しむぞいぢらしき。エヽ胴慾な「死神」め。情知らずめ。うじ虫め。よくも〳〵世の中の、うつくしいといふものを、遠慮もせずに殺したな。さアたッた今、其譯聞こう。この世に居れば菫の花に、香りを添ゆるアドニスの、其姿を亡いものにして、何の腹愈にならうぞや。よもやをそろしい其方でも、花の姿を見たならば、殺そうとは思ふまいに。エ盲目の「死神」め。アドニスの花の姿は其方に見えぬか。今に見よ〳〵「天運」が其方の上に報ひ來て、この大罪を罰せぬ事か。チエヽこうして泣いた溜め涙。一滴たりとも强欲の其方に飲してやりたいもの。喃悲しや、理も非もなッにも知り居らぬ、其方の樣な者の手に、花の姿をむざ〳〵と、渡さんす天道樣が恨めしい、と搔口說き、泣沈みしぞことはりなる。

聞けば遙に彼方より狩人の聲すなり。泣きくづをれしビナスには、耳新しくぞ聞ゆるも道理や。偖は今しも聞えしは、其かあらぬかと、ビナスは涙をゝしぬぐひ、胸を叩いて心に聞けば、正しく其よ、戀人の聲よと忽ち勇み立ち、今が今迄、泣女神、心元より輕ければ、愁眉いつの間にか山風に開け、かなしうれしも一足飛び。アドニスは生きてに相違なし、さア「死神」をうじ虫と、いッたは妾じや御座んせぬ。イエイ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

エヽ其方は墓塲の王樣ぢや。優し床しの「死神」じや。今のはみンな上談ゆへ、さア許して下さんせ。あの血だらけな雄熊に遇ふて、妾は血迷うた、間違へた。ホンに妾が惡いのか。思へばあの雄熊めが、いらぬ智惠をぞ付け居ッた。と非を理にいふも戀故に、迷ひに迷ふ心やあはれなる。

吹く風に草の葉音や、角の聲。うれしやとビナスは彼方へ馳せ寄り驅け寄り、見れば喜びも空なりけり。ハッと一目に魂消えて、朝日にかすむ星影の、見えずぞなるが如くなり。吾戀人の血にまみれ、草の色さへ紅の、吹き渡る風たちまちに腥くぞ覺えたる、ビナスは大地に身を投げて、アドニスの花の屍を抱き起し、言はんとすれど呼ばんとすれど、戀人のこの字も口へは出でやらず、泣き明したる眼さへ今は、狂ひて耳だになし。

狂ひの眼を見開きて、眺むればこはそも胸の上の、一つの傷は三つ四つ。いとしやと吾眼をしばたゝきて、見ればアドニスの面影は、二つとなりて右手も二つ、左手も二つにぞ映ひにける。

喃悲しや。たッた一人のアドニスが、こゝには二人死でぢやげな。妾の眼はどうした事か。火となつて燃えなば燃えね、眼の曇り。消へなば消へね、玉の緒よ、いとしや今日の今が今、この世の花の散りうせて、またと是世にアドニスの、姿に似たるものありや、またと言葉の琴の音に、通へるものがあろうかや。花はうつくしうて色あざやかなれど、まことうつくしいといふものは、咲くにも散るもアドニスの、姿の影にありしよな。知らぬかや、その花の姿を見ては、獅子も吼りを留めつらむ。竹に威を張る虎さへも、其聲音を聞くときは、やさしの涙を濺ぐらむ。されば小河に影のうつりては、瀬を行く魚も淵にあつまり、樹下の影にいこひては、空行く鳥も落ちて鳴くらむ。いかなればそのをそろしき雄熊のみ、このうつくしき姿も知らで、かゝるむごたらしい目を見せしぞ。エヽいとしや、妾が其塲に居たならば、よもやこうした目は見まいにと、大地に伏して泣口說けば、顏は血潮の朱に染みけり。

あはれやアドニスの口唇は、今や蒼ざめて色さへ見せじ。その花の雙の手は、今や冷え渡りて鐵をも欺くらむ。刹那刹那一刹那、刹那のうちにアドニスの屍は煙と消え果てゝ、地に

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

流れたる紅の、血潮の中に咲き出でし、ゆかりの色の花、一輪。あゝアドニスや〳〵、これ戀人の遺物ならば、その戀人の遺物も悲しと、女神は之をつみ取りて、塵のこの世もはやこれ迄、あはれ〳〵と白妙の、鳩にうち乘り白雲の、かなたへ昇りのぼり行く、影さへいつしか見えずなる、かの夏草の〳〵夢の夢こそ、はかなけれ。（大尾）

批評

○横井小楠

松村介石君が、横井小楠の評論、六合雜誌第百四十一號に其中篇を揭ぐ、小楠が、堯舜を祖述するの所以を論じて、無私無慾無功無名の所にありとし、堂々君子の言を以て講說す。近來有數の文字にして、修道者を益すること少なからず。夫れ小楠に於て尤とも學ぶ可きは、其の爽明快哲の才智を御するに至誠の天智を以てし、能く大賢の愚なる所を修め得たるにあり。ポール曰く、吾は福音を恥とせずと。小楠をして若し言はしめば、吾は至誠の愚を恥とせずと告白すべし。此の情ともに同樣の苦點より發すべき也。小楠を學べる勝海舟に於て尤とも推重す可き所ろ亦此處にあり。凡そ天稟朴訥にして自づから仁に近づくは寧しろ容易なり、彼の如き八面玲瓏の智者にして、其智を弄用せず、只管らに至誠に準據するの苦衷、は凡人の知る能わざる所ろならん。松村君此回の論文亦た此邊の趣きを寫す。而して吾黨が此論文の起草者を重しとする所以のもの亦た同樣の點にあつて存す。夫れ火質を冷やして靜念無爲の德を學ぶは非常の修練なりとす、松村君希はくはいよ〳〵淸健なれ。

○家庭雜誌

民友社內の家庭雜誌社より、同雜誌第一號を發兌す。民友社の事ゆへ、定めし目ざましきものあらんと待たれて、豫ねて歡迎の心地せしが、之を見るに及びて少しく異感なきにあらず。蓋し德富君の文章殆んど無きによるか。されど、他にある三四種の婦人雜誌と比ぶる時は、此雜誌は實に吾社の友人なり。其發達を期望するの情深し。

（人は一個の天地なり）

○傳道師

外國傳道會社の處置を難ずるもの、言に、遙々大金を要する

外國傳道師を遣り來るは、內地の有力なる日本人を傳道師に用ゆるに若かずと。此言もとより理あり。されど、今の日本の傳道會社も亦た同樣の失策に陷いり居る事を辨知せざる可らず。此の傳道會社は、左程有力にもあらぬ傳道師を各地方に派遣し、いつ迄も、其人を用ひて該地方に傳道せしめんとす。而して、其地土着の人物に更に斯職に適するもの多きを顧みず、宛がら是れ、外國宣敎師を我國に送り、いつ迄も其力にて傳道せんとする外國ミツシヨンの失策と同じきもの也。然るに、彼を非るものはあれど、我に反省するもの少なし。吾黨は、固く信ず、日本の獨立傳道の普及策は、學校敎師をして傳道職を兼しむるにありと。久しく此意見を告白して敎人の注意を促がしたるが、近日、福音新報帋上に於て、やゝ類似したる反響を得たり。摘要欄內を參考すべし。因に云ふ、或人は難ず、今日の敎育界の形勢にては、敎師が傳道者を兼ぬるとは、行はる可らず、尙更太甚しき物議を招かんと。吾黨は、基督敎界諸士の過用心を無益なりとす。今日は基督主義を明言して堂々敎育を施こす可なり。時論に掛念して細軟の調和策を取るは、基督敎の精神を屈するもの也。たとひ弟子の入門之が爲に少なくとも公然、明然、其主義を顯現す可し、之れ、尤とも早く勝利を得るの道也。戰に望みては、退讓を愚とす。

早稻田文學の無韻非歌論を讀む

磯貝雲峯

東都の文壇に日に月に現はるゝ新聞雜誌の數實に擧ぐるにいとまあらず。この幾十百種の新聞雜誌が日に月に世に紹介するの文人論客もまた甚だ多しとす。各々自家が得意の文をもて得意の技倆を演ず。千紫美を競ひ、万紅研を戰はすの好景また比するにものなし。或意味に於ては誠に今日はこれ文學旺盛の時代と云ふべきかな。

こゝに去んぬる夏の頃より、千軍を排し、萬馬を切りぬけて陣頭に駒をたて、一種異樣の旗幟をひるがへし、敵やいづこと呼びにける勇將こそありけれ、そを誰とかなす、曰く櫻坪居士旗野士良氏。其說く所は何にぞ、曰くうたには韻なかる可からざる論。

櫻坪居士が初陣の高名は先づ彼の讀賣新聞紙上に見えし、俗歌有韻論によりてあげられたり。(これよりさき和歌の韻につき居士の著書數種ありと聞けど未だ世に公行せしを知らず、されば居士が公然韻學者として文壇に打て出でたるはこの夏よりなりと云ふも不可なかる可し)。其よび聲や高かりけむ、はた其手柄やいみじかりけむ、早くも早稻田の老將坪內氏の目にとまり、早稻田文學紙上に居士が「無韻非歌論」こそあらはれにけれ。余は此に何國の住人、何の某などゝ名のりあげてひと矢仕らんとするにあらず、居士の論は日本文學上の一問題にして、ことに和歌の命運にかゝはる所多かる可ければ、いさゝか余が思ふことゞも左にかいしるさむ。

凡そ詩と云はんもの韻ある可きは古今萬國の文學史上皆ひとしかる可し。その故いかにとなればもと詩のはじめは未だ文字なき時代にあたり、人の感情自から物にふれ、折によりて發せしもの、詩經に所謂咨嗟咏嘆の餘に發せしものなり。たゞ夫れ文字なきが故にさまざまの音節をつけて口より口にうたひつたへたりしもの故自ら韻をはそへたるうたとなりしならむ、櫻坪居士が所謂口は活物にして自然に音調をとゝのへるものなり。わが國古代のうたも其起原は殆んど摸糊として究むべからずと云へども兎に角神武天皇即位以前なりしことうたがふべからず、

彼悠遠なる神代てふ頃より未だ智識發達の度もひくき時代にあつて幾百年の間うたひつたへて萬葉假名の起れるときまでもしくは其以前言語を記するの記號、出來しまで忘れざりし所以のものは全くうたの音調自らよろしきにかなひ、恰も今日いろはをも知らぬ下等社會の童子婦女に至るまで都々逸、端歌等の如き俗謠を誦んじて常にうたふが如くありしならむ、古代の和歌に韵あることまた自然のことにして怪しむを須ひんや。

櫻坪居士が音韵のことを説かれしこといかにも居士が獨創の論らしく見ゆ。然れども純然たる新思想は地より湧かず、天より降るものにもあられば、何かよる所ありて居士の論もおこりしものならむ。即ち支那人が一字の音を二類に分つことと我國の父母子の三音に分くると云ふに起因せるにはあらざるか。大島正徳氏が支那字音を論ずる文に曰く（六合雜誌一四一號十三頁）

（上畧）支那人は字音の組立を音韻の二類に分ち、其上なるを音と唱へ、下なるを韻と名づく。音は略我假名の父音にあたり、韻は我母音若くは母音に撥音ヌ、ム、ン、グ、詰音フ、ツ、ク、チ、キを添へたるものにあたる。今爰には便利のために頭音基音の名稱を付す可し。（下畧）

支那人已に字音を二種に分てり。之に我國の假名が三種に分れて其子音は父母兩音の配合より成るを知らば、假名に音韻區別を付するまた難しと云ふ可からず。母音五字をつひに三音に歸着すると云ふこと居士が創説なるや、あらずや、余未だ知らず。もし居士の創見なりとせば、古歌の韻を正さんとて勞苦の末居士が發明せられしものか。即ち三音に歸するか故に古歌の韻律を知りたるにあらで、むしろ韻律にかなはせむがため、母音三音説のいでたるにはあらざるか。エのイに歸し、オのウに合ふと云ふも明かならざるが如し、他音に比すれば、よく似よりたる音なれども、うちつけに同音に歸着するといひ、之を標準として古歌には必らず韻ありとなす、少しく速斷に過ぐるところなきや。古來幾多の音學者がこのことを云はざりしも故なくんばあらず。」

今試みに母音五音をおもむろに發音せよ。果して櫻坪居士の云はるゝ如く開口、中口、合口の三韻に歸するが。エ韻はアとイとの間にしてオ韻はイとウとの間なるが如し、即ちエ、イ兩韻はイ、ウと同一のものとは思はれず。然らば古歌有韻論のために母音三音説は起りしものと見るは非耶。

以上はたゞ假名の音につきて少しく卑見を述べたるに過ぎず、いでや一歩をすゝめて聊かうたがひをのべ、居士の教へを乞はばや。

第一古歌を以て唯一の標準となすはいかに。居士が所謂母音之音説によれば、ふるき昔のうたはおほかた韻ありとの説もいづ可し、さては古歌の韻に四種の區別も起らむ、むかしよりうたに韻あること明言せる人なきに、いまや居士が叔父小川翁の跡をつぎて、和歌有韻説を創始せられし、卓識はさることながら、居士が古歌の韻律を以て今古二千年のうたを判定し、其四種の韻律にかなはざるものは即ち非歌と論じ去るが如きは甚だ速斷の嫌なきか、そは（其一）居士の所謂四種の韻律の外に尚音調をよくする押韻の方法なしと斷言する能はざればなり。例せば居士が無韻の例として擧げられたるうたのうちにて後撰集の

○君こずて、年は暮にき、立かへり、
春さへ今日に、なりにけるかな。

又拾遺集の

○春風は、花のなきまに、吹きはてれ
咲なばおもひ、なくて見る可く。

又小倉百首中の

○春すぎて、夏きにけらし、白たへの
ころもほすてふ、あまの香具山。

○住の江の、きしによる浪、夜さへや、
ゆめのかよひ路、人目よくらむ。

の如きもこゝろ靜かに、うち詠ずれば何となく音調よろしきところあるにあらずや。これらは皆居士の韻格には合はずと云はるれども、之を詠ずるに於て音調よく、また人を感ぜしむるに足らばうたと云ふも不可なかる可し。西洋の詩にも、首韻 Head rhyme 中韻 Middle rhyme など云ふものありて、居士が所謂四種の韻格に合はざるものとす。余が上にひきたる四首のうたに○●點を附したるは不規律ながら自ら音調を助くるが故に一種の韻と云ふも可なる可し。後世のうたと云へども其秀逸なるものはほとんど余が所謂不規律なる一種の韻にかなふが如し。

ヨシ櫻坪居士の韻格には入らずと云ふとも。居士が説かれし散韻法及び律韻法はともに詩經に其例あり。「參差荇菜左右采之」云々と云ふは即ち散韻法にして、「葛之覃兮、施于中谷、維葉萋々」云々は律韻法、「參差荇菜左右流之」云々は散律兩法よりなるものなり。後學歌と云ふは支那古代の詩にもあるが如く、西洋にはうたいものゝ內に殊に多し。假韻又は間韻と云ふは他邦の詩歌になきが如し。されば居士が韻格とせられし四種の區別も其三種迄は他國の詩歌にもある所なり。わが國のうたは自ら他國の詩歌とことなるものなれば、同一の韻格を以て判定し、たゞちに歌なると、あらずとを定むるは不可なるべし。余は思ふ、和歌には西洋の詩に見ゆる首韻の如きもあり、また中韻に似たるもあり、兩者混ずるが如きもあり、また兩者と居士が所謂間韻と混ずるが如きものもあり、即ち和歌に特有なる韻格ありて自ら音調を助くるものありと。

（其二）櫻坪居士が云はるゝ如く、後世のうたは「目で見るの歌にて、耳に聽くの歌でなく……即ち古今集以下の歌は唱ふ方が主に非るより、韻の必要がなかりしと思はる」。何處の國に於ても詩歌發達の順序はしかなり。はじめには唱ふものなりしが、世の變遷とともにうたふものとうたはざるとの二種に分れしなり。我國

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

のうたも自然の順序によつてつひに、目に見るものとはなれり。唱ふものは俗歌歌曲、謠曲等にて、これらは耳に聽くうたもしくは樂器に合せたるものなりき。

斯く和歌が變遷し來りしを思へば、其韻格も自ら古今相ことなるべきは自然の理はりならずや。さるを古格に合はずとて歌にあらずと云ふはいかに。古格の外にも和歌に特有の韻格なしと斷言すべからざるをや。未だ歌なるとあらずとは必らずしも韻の有無を唯一の標準となす可からざるをや。實に鵜田喜一郞氏が云はれし如く（早稻田文學二一號時文評論）、散文と詩との區別は韻の有るとなきとにのみよるのみにあらず。「假令へロドタスの著書を有韻の文字を以て換ふるも、其無韻なる時よりも何も變れることなきを以てなり」。歌の歌たる所以ほかにもなかるべしやは。

第二韻格を極端に主張するの利害。詩歌の散文とことなる所一にして足らざることすでに辨ずるが如し。然れども余は亦極端に詩形即ち音調韻格等の事を輕見するものにあらず。一種の論者が云ふ如く、必らずしも詩形を末事なりと思はず。兎に角詩歌と散文と同じからざる諸點の內、韻格も大切なるものゝ一なることと余亦之を承認す、然れども韻格に、而も古歌の韻格に合はざるものは歌に非ずと論じ來るに於ては余は恐る、また甚しき弊害の生ずべきを。

昔はうたをよむに題を設くるとなかりしに、後世題詠といふこと始まりて、うたの道衰へたりと云ふ。そのおとろへし故よしは如何に。題に束縛せられて、作るこゝろ起りしが故なり。語をかへて云はゞ香川翁の所謂構へてよむが故に、誠を失なひて自然調（言語上の調子にあらず）をはなれたるが始めにて、やがて故意の作りもの出でたるなり。少しく心すれば題詠なりとて自然の感情を發輝しうべきに、おほかたうたの道衰へたり。ましてこのうへに韻格のこと說きいでゝ古歌を今日に唯一の模範とせば、斯道のゆくすゑはた、いかになるべきか。古へより秀逸とよばるゝうたどもは皆性情の自然にかなひて、誠をよめりしものなり。これらうたは一として其音調のとゝのはざるものなし、こと更に韻格に合はせんと欲せしに非るも自然に合ひたるなり。然らば先に韻格を數へて之に合ふ所のうたを詠めと云はむより、其誠を感ずるがまゝに詠むべしと云ふの弊害なき方はるかに勝るにあらずや。かくするに於てはもとより、櫻坪居士が說かれし四種の韻格に合はざるうたもいで來む。よし合はずとも誠にうたたらばまたよからずや。

余は寧ろ韻をとゝのへんために歌を作らず、誠の歌を詠みて自ら韻の備はらんことを希望するものなり。韻格の一事は實に歌の道の盛衰に關はる所少しとせず。

余は無韻非歌論てふ語の甚だ穩かならざるを惜む。

韻格の事にあらざれども櫻坪居士君が代のうたを說くの意、余不肖にして未だ解する能はず。君が代は千代に八千代にとあるは此所本居翁が云へりし如く、千年も万年もてふ意に八千代と云ふ語は必らずしも數を限らず、八千種、八百萬、など云ふ八と同意ならずや。居士が彌千代の義なりと云はれしこと何のよる所あるにや。

以上はこれ余が居士の議論に對して、いさゝか意に會せぬことゞもを述べたるなり。されどもつらつら思へは、文脉はこよなく亂れ、詩歌の音調、韻格抔ゆめにだも說く人もなき、今日にあたりて、居士が多年勞苦の結果を世に示し、われら後進の徒を敎へ給ふこと誠に日本文學の爲に多謝するところなり。國詩の將來は如何（余は韻文と云はず）。其語格、韻律は如何にすべき。またいかになるべきか新躰の國詩を起すの道如何。これらの問題は實に日本文學のために大に研究を要するものなり。居士が說く所の韻格論、思ふに將來國詩の發達を助くるもの少々にあらじ。居士乞ふつとめよ。嘗て讀賣新聞紙上、城南評論の虎南子に答へ給ひし時、俗耳に入りやすからん爲めに、俗歌をとりて論ぜしになほ注目する人なしとて「つれなき世」を嘆かれしこと、誠に同情の念に堪へず、然れども居士よ、落膽する勿れ。世はつれなきにあらず、未だ詩歌を味ふの程度にすゝまざるなり。まして韻格のことをや。おほかたの世の人には馬耳東風ならむのみ。世すゝみ、時至らばまた人自ら注目せむ。世人の見るとあらずとは問ふ所にあらず、道の爲に盡すを得ばまた可らずや。

明治廿五年菊月中旬

雲峯　妄　言　多　罪

摘要

○傳道につきての所感

福音新報紙上に、植村正久氏が題號の所感を連載し、其第五に至りて、「傳道に從事する士人につきて」の結論を載す。主旨に云く、

故に小なる町村に起れる信徒の團躰にては、其土地に住みて多少の資産を有し今の傳道者の如く俸給に露命を繋ぐの必要なき有志者をして、其傳道牧會の事務に當らしむべし。而して此の如き數團躰は協議して智德兼備の良牧師を招き之をしてその區内を巡回せしむるときは布教牧會の上に毫も差支を生ずることあるべからず。是の如くするときは。今日の如き不都合なる傳道者を廢するを得べく、傳道の事業を貫くするを得べく、傳道の志氣を操作するを得べく、有力なる牧師傳道者の起るを期すべきなり。

○堯舜、小楠、及勝海舟

六合雜誌第百四十一號、松村介石君、横井小楠論の中に、古來の諸聖賢が、各方面より堯舜を祖述する所以の種々なるを論じて云く、

孔孟は其治國經世の道を稱し。莊子は其無私無我無爲の德を揭げ、朱子は其窮理正心修己の所に服し、而して陽明は其本眞を攫べて廣く之を民に及ぼしたるの工夫を拜す

又、勝海舟の事を論じて云く

勝海舟甞て刺客に遇へり。乃ち悟して曰く衆怨しかく我れに迫る、我れ畢に免る能はざるべし。已に免かる能はずとせば之を拒ぐ亦た無益なり、たとひ之を拒て其一二人を斃すとも我れもし畢ひに免れずとせば徒に無益の殺生を爲すに過ぎざるべしと、乃ち爾來敵に向ふて揚言して曰く、凡そ誰にても予を殺さんと欲するものは、即ち自由に殺さすべし、但しその予を殺すの前に當りてよろしく我心胸を誤解せざらんことを是れ勉めよと、於此乎、邸門の護衞を絕ち、内は婦女のみを以て從事せしめ、常に刀に紐して待てり、其後刺客又屢々入り來れり、海舟乃出でゝ迎えて曰く、公等我を殺さんとて來るか、さらば來れよ、我れ我が主義綱領を語りて後、而して從容死に就かんと、刺客また其旨を領す、海舟乃ち彼等を奥の座敷に誘ひ之に茶を汲み、果子を呈して後、徐ろに其心胸を吐述し去り、かくて曰く予れ已に身を以て國事に殉ふ、敢てまた死を辭せず、今已に我心胸を吐述し了れり、公等もし尙ほ我心胸を非なりとし、又予が主義を曲なりとせば、則國家の爲めに予を刺せ、予れまた國家の爲めに請ふ公等の刄に死せんと、於此乎刺客は往々にして其誤解を知り、其猜疑を晴らし、而して終に其公明の心に服して、敢てまた彼れを殺すを能はざりしなりと海舟は其悟道に於て横井小楠を學びたるものとす、其の之れある亦た怪しむに足らざるなり。

片々

可愛子編

●北海勇少年　同會は、小山恒次郎、柳舘清太郎、二氏の發起にて、禁酒、禁煙の主義を以て、北海道に起りたり、今其規約を得たれば、左に之を揭ぐ。

勇少年規約

第一條　勇少年は他日社會燔風家の位置に立んことを欲するものなれば禁酒禁烟の良慣習を養成し品行を端正にして學術を勉强し智識を交換し他少年の好模範たらんことを目的とす

第二條　勇少年は本部を幌泉郡幌泉村に置く

第三條　勇少年本部には部員の撰擧を以て左の役員を設く

部長　一名　副部長　一名　理事　三名

第四條　役員の任期は一ヶ年とす但し再撰することを得

第五條　部長は部の總理をなし會集の長となり副部長は部長を補佐し理事は自餘一切の業務を分擔す

第六條　總て役員は無報酬とす

第七條　贊成者には左式の章標を贈與す

（章標圖略す）

第八條　部員三十名以上を有する地方には支部會を設くることを得

第九條　贊成者は加盟の際金七錢を納むべし

第十條　加盟者は毎月維持費として金二錢を納むべし

但し加名の際四ヶ月分以上の金を前納すべし

第十一條　毎月一回演說談話會を開會す

第十二條　贊成者は左式の誓約書を差出すべし

誓約書　（用紙は中紙）

郡村番地族籍

（校名學級）　姓　名

年　齡

私儀貴部の主意大贊成に付自今誓て勇少年たるに背かざるべく候間玆に誓約候也

年　月　日　右　姓　名　㊞

北海勇少年本部御中

第十三條　勇少年は滿二十歲に充つるを俟て特に本部に設けある勇壯禁酒會に轉するものとす

第十四條　本部の規約は部員十名以上の發議に依り常集會の議決を以て訂正することあるべし

第十五條　部員にして規約を破り又は本會の名譽を汚すが如き處爲ある者は直に除名す

第十六條　殊に本部の主義を擴張盡力したる者には相當の報酬をなすものとす

第十七條　本部は部員三百名に充つれば機關雜誌を發刊す

●**名古屋青年會**　は當時會員大凡四十名、會館は名古屋市榮町百十四番戸に在り、館内に新聞雜誌縱覽所を置く、來觀人日々大凡六七十名、館内亦別に書籍室の設ありと雖も、創設日猶淺く、書籍亦僅少なり、每土曜日集會を開き、時々公衆大演說會を開く、同青年會は重もに社會的事業に注目し、眞理の擴張を計ると共に進んで青年社會の改良進歩を計り、青年者の品格を高尚にするを以て目的とせり、實に此の名古屋の如く頗る物事に冷淡にして殊に宗教思想に乏しく、宗教と云へば一般愚夫愚婦が後世願ひとのみ自信するのみならず、尙ほ彼の維新前のキリスタン邪宗門御法度の儀云々との所謂守舊的精神、迷信的精神の頗る盛にして、未信者の教會の門戶を潜ること最も容易ならざる地方に在りては、此の如き働き此の如き傳道は最も必要なることゝ信ずるなり。

●**前田正名氏と奈良實業青年會**　「前田が言ふに非ず、國家が言ふなり、前田が泣くに非ず、物產が泣くなり」と或る處にて曰へりといふ、當世の摯實男兒前田正名氏は、過日大阪に滯留せし際、電報を以て奈良實業青年會員中一兩名來坂ありたしと申し遣はしければ、仝會員中井倉芳之助、坂田一郎の兩氏は、早速大坂に赴むき前田氏に面會せしに同氏は喜悅の躰にて、實業青年會と云へるは奈良を以て嚆矢とする事なるが、余も非常に此組織を喜ぶ者なれば加盟致し度と述べたるに、兩氏は早速承諾し、仝會の規則書三十部を同氏に與へたる由、尙ほ同氏は兩氏に向ひ、以後余は奮ふて仝會の爲めに力を盡し、互ひに智識を交換して擴張の勞を執るべく、且つ貴顯の人々に是非加盟を勸むる積りなりと、懇々仝會の事に付き談話したる趣。

●**傳道隊**　北海道函館の聖公會は、靑年の人々にて傳道隊を組織し、每週水日の兩夜人通りの最も多き處にて路傍說教をなす、傍聽者甚だ多く、時々一二の妨害者もあれど何れも沈着に聽聞するといふ。

●**上毛南甘樂青年會組織改革の運動**　去る八月二十日の協議會の議決に基き、中央集權の弊を矯め、分權の主義に因り、大に從來の組織を改革し、內は以て會員各自が自修の道を盡し、外は以て協同一致して對外の運動に當らんとし、先づ遊說委員三名を派し郡内各地有志者の意見を叩かしめしに、其最も多く贊同を得たる方案は左の如しと。

一郡內を四部に分ち各部青年會館を設置すること
一每月一回順番に各會館に於て公開演說會を開き各部の會員は可成出席警醒の務を盡すこと
一各會館の會計其他役員撰擧等は凡て其部內の自治に任すること
一各會館に私塾的の夜學校を開き部內年少者を薰育監督する處となすこと
一各部は悉く其自治に任ずるも本會を一貫して血となり脈となるべき所謂一種の青年氣風を養はんが爲其年少者の薰育監督は出來得る限り同一の方法を取ること

●**フレンド**　芝普連土教會には、フレンドと名くる青年會あり、每月一回、人を聘して演說會を開くといふ。

●**同志社同窓會**　は今月に於て、牛込市ヶ谷仲の町グリーン氏の邸園に開く。

●**すた、生の投書**　本月三日發兌の貴社雜誌、函館娼妓品評會てふものに就て、女報中に一言せられたり、それにつきて思ひ出す事こそあれ、先月中北海道物產共進會、當地に開かる、共進會に一層の光彩を添へん爲め、當道有志者によりて組織されたるもの、之を協贊會となす、開會中、烟火、競馬、音樂等、種々の催をなせしは、此協進會なり、余輩一日競馬場に臨む、競馬數番、偶ま咄々怪事を見たり、そを何とかなす、只見る、數輛の人力車、各々白首紅裙の賣笑婦を乘せ、轆を聯れて現れ來れるを、呼んで車夫の競爭といふ、滿目山をなすの觀客、坐を立ち席を離れ、拍手喝采、しばしは鳴りも止まざりし、是れそれ何等の卑態ぞや、競馬と車夫の競走、車夫を馬の仲間と視做したるか、されどこはしばらく問はざるべし、その殊更に賣笑婦を引出したるは何故ぞや、呼んで車夫の競走といへども、其實賣笑婦の品定にはあらざるか、之を以て面白き餘興と思ふ、協贊會も協贊會なり、拍手喝采する觀客も觀客なり、今更珍らしくはあられども、當世人心の趣勢が、如何にも卑汚下劣なる、余輩は將た慨歎に堪へざるなり、事小なるが如くなれども、又以て當地人士心趣の一斑をトすべし、風教に熱心なる記者足下の參考となす、因に云ふ、同日觀客中に永山屯田兵司令長官あり、所謂車夫競走の始まりし時、坐に堪へずして去りたりと、さもあるべし。　在札幌　たす生

同胞之を見て如何に感ずるか、嗚呼北海道の事、豈言ふに忍びんや、傳道なる哉、教育なる哉、矯風の運動なる哉、蹶起せよ、北海道の義勇青年。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

哲學者及び學術者には

Pythagoras; Socrates; Hippocrates; Euclid; Plato; Aristotle.

詩人には

Anacreon; Aeschylus; Pindar; Ewripides; Sophocles; Aristophanes.

彫刻家、美術家には

Apelles; Phidas; Praxiteles;

歴史家には

Herodotus; Thucydides; Xenophon.

雄辨家には

Aeschines; Demosthenes.

(二)、而して此の二十八氏は、皆な、アッチカと云へる小き都(當時文物の中心)に生れ、若くは教育せられたる人々にて、何れも此都に關係を有せざるはなし。即はち希臘の偉人二十八氏は、小き都アッチカより造り出されたりと云ふべきなり。

(三)、左れど、實に、アッチカにて生れたる人は、百年間に其中の十四氏なれば、先づ此十四氏に就きて遺傳の理法を明らかにせんとするに、尙ほ驚くべきものあることを見るなり。當時、アッチカには自由の民九万人ありき、而して一世紀(一百年)の間に、人は大抵三代變するものなれば、アッチカ極盛の百年間に、九万人の三倍たる二十七万の人生れたりとせよ。此中半數を男子として、十三万五千の男兒ありけるうち、二十五の丁年に達せざるもの亦半數なるべければ、殘數六万七千五百人は、アッチカ全盛百年間の丁年男子の數ならん。此中より、十四人の偉人を出したるを以て、アッチカの自由の民四千八百二十二人に付一人宛、古今に秀抜せる人物を出したり。あゝ五千人に付一人の偉人を出すことは、空想にあらず。昔しグリーキの一小都に於ては、實際此驚くべき偉績を奏したる也。

(四)、何故に、如此く偉人續出せしかと云ふに、其理由の最大なるものは、即ち十遺傳の理法にあり、故に、一と度び婚姻の風儀破れ、異種の血を混するに至てより、俄然として人才蜚出の途を塞ぎたり。ガルトン其天才遺傳(ヘレデタリージニアス。三四三)に希臘衰弱の元因を列擧して云く、

婚姻の制緩漫となりしと

婚姻を嫌ひ勝手に放埒するもの殖しと

多能有望の婦人惡德に流れ隨て子なかりしと

放埒よりして身躰に害毒を生ぜしと

次代の民の母異種の人なりしと

此等の元由は、皆な遺傳の理法を破り、折角に蓄積したる天才の血統を破壞したる事情を指示するにあらざるはなし。左れば、希臘の衰弱は、過半其天才の遺傳法を破りたるによると斷言するを得べし。

(五)、希臘は、遺傳の法を利用して、古來無類の人才を一時に蜚出せしめたり。而して、其法を破りたるにより、亦俄然として衰へたり。遺傳の、人才國家の盛衰存亡に關する大なること、如此し。

三段　遺傳の區域

(一)、同じきもの同じき者を生む(Like begets like)と、之れ生物界普通の天則にして、而して亦遺傳法の根礎たり。遺傳は、身躰形骸の上に著明なるのみならず、亦心理の上に於て著明なり。而して身躰形骸の上に於ける遺傳の顯然たるとに至りては、亦細說するを要せざる程なり。たゞ其の遺傳の行はるゝ區域如何に廣きかを、左に畧示すべし。

(二)、リボット氏の遺傳論(ヘレデテー)は、其首章に於て、生理的遺傳の要項を擧盡したり。諸君暇あるとき參看するを可とす。余は、今ま、其大畧を擧げ、遺傳の區域の極めて、周密廣大なるとを示さん、

子にして全く父に似、殆んど見分けがたきに至るもの多し。

兄弟若き間は、其父に似、同じき頃姉妹は其母に似たるが、晚年に至り兄弟は母に似、姉妹は其父に似るものとなりたるものあり。

フレデリック、ウイリアム第一は、巨人を好み、撰擇制治したりければ、其下に、多くの巨人出來たり。

身躰の皮膚の色、形、大きさ皆自由に其子に遺傳すると多し。

啻に外部の躰格のみならず、內臟の諸器關より血液運行の何如に至る迄で、皆一々遺傳す。

特別の癖、特別の形、皆悉く遺傳す。男子產力の多少、壽の長短、勢力の强弱等皆一に遺傳す。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廿四人の子を產みたる母の娘五人は、合して四十六人の子を產みたり。母か產見力も亦遺傳す。

疫病に感染せざるの族あり、能く遺傳す。

聲音も遺傳す。

習慣も遺傳す。

疾病も遺傳す。

(三)、右に大畧を示したる如く、身體形骸に關する上の遺傳は、極めて顯著なり。然れども遺傳は啻に之のみにあらず、極て微なる心理上の諸性質に至ても、亦一々此理法を洩るゝことなし。天能(インスチンクト)も、官能(センス)も、記憶力も、想像力も、智力も、情感も、意思も、國民の氣風も、各人の藝能長所も皆一々遺傳す。

(四)、フランセス、ガルトンは、專ら遺傳の理法を研窮する所の學士なり、嘗て英國著名の學者全體に書を送り、樣々の質問を寄せて、其答を集め、以て遺傳の理法を概括研究したるが、其成績載て、英國學者(イングリシ、メン、チザ、サイエンス)に在り。細に其記載する所を察するに、凡そ著名なる學者は、皆な其父母親戚より、夫々の學能を遺傳したることを見るなり。又、リボット氏は、遺傳は身體にのみ關するものにあらず、必ずや心理の上にも關係することの理由を證明せんとて、尤も周密博識なる遺傳論(ヘレヂテー)を著はしたり。ガルトン氏が、天才遺傳(ヘレヂタリー、ゼニアス)も亦同樣の志に成る。余は今ま一々其例證を擧げず。然れども若し此等の三書を繙かば、實證雲の如く集まり、明白天日の如く、毫も爭ふを能はざるを見ん。

(五)、余は、左に精神上の遺傳の尤も顯著なる事實を少しく列擧し、以て其全般を推知するの料とせん。

(六)、記憶力も遺傳す。ガルトン曰く、英國に希臘語學者として有名なるリチヤード、ポルソン氏の家族は代々記憶力に富めり故に「ポルソン記憶」と云へる、諺を生ずるに至りぬと、リボット曰く、セ子カの父子に於て其例を見る、父なるマーカス、アンナウスは二千の語を其聞きし通りの順序にて復誦す而して其子なる、ルシアス、アンナウスも亦、之に劣りたるのみ等しく珍らしきほどの記憶力を有したりと。

(七)、想像力も遺傳す。先づ詩人に付て言はば、バイロンは其の多情多僻にして殆んど半狂の如き母より遺傳したり左れど之れのみならず其父母の兩血統を尋窮すれば何れも皆な氣質不調子の人にあらざるはなし。故に諺にも云へり、もし遺傳と云ふことを證せんとせば、バイロンを見よと。ゲーテは生理上に於ては其父より、心質に於ては母より想像を遺傳したり。其他、ポルンスも、ミルトンも、チヅチルスも皆な此に類す。次に畫工に付て言はば、ベセリチ、チチアンの家族には、有名なる畫書九人あり、チントレット、ロブスチの子は男女ともに亦た著名の畫工たり、バッサノは父も四人の子も皆畫工たり、其他此類多し。最后に音樂者に付て言はゞ、セバスチアン、バッハは、一五五ヶ年より以降八代凡ソ二百年間に二十九人の第一等音樂者を出せり。ベトーベンの父も祖父も樂人たり歌ひ手たり。モザルトの父も妹も子も皆な同じく樂人たり。メンデルッソーンの祖父は美學論に數多の著書あり、叔父も之に同じく、其姉妹は名高きピアノ彈たり、此類甚多し。

(八)、智力も遺傳す、アリストールトは父は醫學書の作者たり、子は論理論の著者たり、嫁も亦名あり。ベーコンの父も母も名高き人にて特に母は名家の娘たり、ラテン、グリーキの語にて巧に詩を作りたり。前年ベーコンを作りしは母なり、母はベーコンを生みて之を養育したり、故に女性に高等學ふを教ゆるを要せず、たゞ育見法を教ゆべしと云ひたる大學教授あり。彼人はベーコンの母亦た學者たりしとを知らざりし也。此他、ダルヰン。ハーシエル。ミル。マコウレー。マダム、デ、スタル。ゼームス、ワットの類尤も名高きもの也。

(九)、意思も亦遺傳す。ジウリアス、シーザーが家には代々一種の變僻傳はり居たり、チヤーレス第五世と其祖父ドン、カーロスとの似寄りたるとは史論中著明の材料たり、ロバート、ピール。リシリウ。シエリダン等が家族並にアレキザンダー大帝、シシピチ、トレミー等の血統は尤も著明なるものなり。

(十)、以上は精神上遺傳の尤も著名なる事實を列擧したるものなり、夫れ一個人々の上に於て此の理法の行はるゝ事斯の如し、故に一國民の氣風となりて國風の上に遺傳する事亦之に讓らず、各國各自にその風を異にするは他に種々の元因あること勿論なりと云へども一大元因として遺傳の理法を算入せざる可らず、例せばユダヤ人の如き、カゴット(現にピレニース の北方なる、ギユエーニ、ガスコニー、ビールン又はナバーレ、ザウブヅコア、或はメイン、ブリタニー等に住居

する人種）の如き、ヂプシー（ボヘミヤ人、ツンガリア人は此類なり）の如き凡そ其の國民の氣質を維持して千古其臨を變せざるものは其尤も著明なるものなり而して各國民風の容易に變はらざると亦多少之に類す。

四段　遺傳の種類

（一）遺傳の區城の廣きと前段說述するか如し。ゼチセフ、クツク氏之を概括し、其種類を列擧して曰く。
（二）第一は直接遺傳（ヂレクト、ヘレデテー）と、即はち子が親に似るを云ふ。
（三）第二は復祖遺傳（Reversional H.）と、即はち孫が其祖に似るを云ふ、
（四）第三は遠係遺傳（Collateral H.）と即はち子が其叔父叔母に似る類を云ふ。
（五）第四は同類遺傳（Co-equal. H.）は即ち多くの男女の子不思議にも亦似るを云ふ。
（六）第五は先祖遺傳（Pre-marital）は即ち先夫夫先母に似るを云ふ。
（七）第六は胎內遺傳（Prenatal II.）即はち母が胎內に在る間に非常の化を蒙りその感化するものに似るを云ふ。此の事に付ては次章に更に明說すべし。
（八）第七は最初遺傳（Jnitial H.）と即はち第一の直接遺傳に似て稍異なるものを云ふ、蓋し父母が其子を產したる當時の僻、幸不幸等によりたる感化に似るものなり。

五段　遺傳法の利用

（一）、遺傳の理法は人世の實を穠むものなり、人の靈性にして若し遺傳するとなからんには、喩へば灌木の一年茂り榮へて后忽ち枯るゝが如し、遂に亭々たる喬木となると能はざるなり。抑も遺傳理法存す、こゝを以て人は漸次に開化し、世は段を追ふて文明に進むなり。經に云く、第一のアダムより人罪に入り、第二のアダムより人救に入ると。人の善となる惡となる共に遺傳の理法に關すると多し、今日吾等が爲す所の一事は、后世万代に影響すと考へ來れば、轉た責任の重大なることを感ぜずんはあらず。

（二）、且つ此の理法の教育に關係すると、極めて多きか故由は、一聞して直に明瞭たるべし。今日人を教ゆるの教は、永世に續くべきものなり、一點一劃の天の則も、決して破るゝとなし、今日人の爲に爲したる最と些細なるとも、必らずや后に其報ひあらんとす。左れば愚かなる人なば、一層の熱心を以て教へざるべからず、この愚を遺傳すると、之を賢にしたるものを遺傳せしむるとは、万世に天地の相違あれば也。

（三）、人もし其子を好く教育せんと欲せば、六才小學校に入るのとき、初めて綿密に用意せりとも、尙晩し。最初の用心は、其一生の同伴者を定むるのときにありと云はざる可らず。今世の俗、身代持參金などに注意するものはありと云へども遺傳の理法に隨て、如何に多くの實を其の心理上に所藏するかを考ふるもの少なし。但し又身躰の上に遺傳病のあるかなしやを穿鑿するものはありと云へども、精神上に如何なる惡僻惡質を遺傳するかを考ふるもの少なり。斯て、男女輕々しく相婚し、最初に於て惡の種を子孫に遺さんとす。異日、子孫の普に完きとを得ざるも亦其根源なりと云べし。

（四）、ゼチセフ、クツクは、遺傳の理法を研窮細思して、遂に其利用法幾多を說けり。今ま左に之を揭ぐ。其直接教育に關係せざるか如きものも、間接に之に影響すること、多きものなり。

（五）、曰く、人種を改良せんには遺傳の七種の一つ若しくは二つに、特更ら重きも置くとなり、其何れにも重きを置きて、之に用心するとを要すと。左れば、一個人の好き發達を希ふにも、亦七種の遺傳法の關係する所を考へて、諸方面悉く好き種を傳ふる樣、準備せざる可らず。

（六）、曰く、同類遺傳、及び最初遺傳等により、その子の男女に父母の性質を同樣に傳ふるもの理法に鑑み、男女はもと自から同樣同格の影響を蒙むるものたるとを知り、且つ男女の世に存する大抵相併行平均するものたることを推知し、之よりして一夫一婦の天則を確認す。加之、父母の性、斯く斗り、相合同して其子の男女の上に遺傳し而も其子の男女は斯く斗り相似るべきものなれば、其子は即はち一人の父一人の母より出で、其同胞相似て相親まざる可らず、之あらんが爲めには、亦一夫一婦の天則の極めて、切要なることを知るなりと。

（七）、曰く、現今人々の爲す所を見るに、其力其業に適せず、皆任重くして量足らず、營々として日に弱り行くを見る、此時に當り、人の精力を強くするの法なかる可らず、而して精力を強くするに先づ尤とも欠く可らざるは、一夫一婦の天則

を實守するにあるとを遺傳の理法によりて認知すと。

（八）、曰く、同族婚姻は、次第に人を弱くす、貴族王家の人の大抵暗愚なる大元因の一は即はち之なり、故に人は位階等級によりて擇び相婚することなく、高貴なる人を得て、之が同伴者となるべし、然るときは必ずや美質を遺傳するとを得ん歴史上最大强國の人民となりたるもの〻遺傳系統を考ふるに、多くは、皆な種々の善き血を混じたり、決して一族同宗の中にてのみ發達したるにあらざる也と。

（九）、以上クック氏の論話は、要するに婚姻の制度を清くし重くするにあり。遺傳の理法嚴そかにして消す可からず、而して此の理法をして實行せしむるの方便は即はち婚姻にてあるなり、婚姻の事最とも愼しまずんばある可らず。地質學者デーナ問を設けて曰く、今まの人類の次には何如なる生物か來らん、今の人類は下等動物より進化したるなり、此人類將に何如に進化せんとする乎と。其想像に至りては固より「デーナ」氏と同じからず、然れども人は必らずや靈魂上に於て大に進化すべし、而してその進化を實行し、維持し、擴張するものは即はち遺傳の理法なり。

（十）、子は其生れざる以前より、否な之を生まん爲めの婚姻未だ成立ざる以前より既に教育學上の注目を要す。人は既に教育學の保護案内を經て成人し、其蓄積したる才能德性を后に讓らんとするとき、亦た后世の爲に教育學上の注目を要すこれ即はち教育學中の遺傳の理法なり。

第五章

胎教

一段　序

（一）、列女傳に云く、古者婦人子を姙めは寢るに側だず坐るに邊よらず、立に蹕せず、目に邪色を視ず耳に淫聲を聞かず、夜は瞽をして詩を誦し正事を道はしむ、如此すれば則ち生る〻子形容端正にして才人に過ぐと、之か爲に文王の后は胎教を爲せり。

（二）、子が母の胎内にあるときは、猶ほ母が一身に繼がれる五躰の一の如し、五躰は全身の氣によりて影響せられ、全身は一心の何如によりて感化せらる〻ごとを思ふに於ては、母が胎内に其子を懷けるとき、その身及び心の上よりして之に影響感化を與ふることの多きは勿論なり。

（三）、人の一生は其幼時にあり、而して幼時の氣質躰格は既に胎内にあるときに定まる、母が胎兒に於けるの關係は極めて緊要なるものあり、此の處に於て先づ教育を初めざる可らず。

二段　身躰上の胎教

（一）　心によりて肉躰を制するとを得、强烈なる精神を以て病死を防ぎ止めたるもの少なしとせず。ネルソン既に死せり、然れども其の精氣尙盡きず心臟動殆んど絕するとき、尙生きて最后の戰捷の報を聞き則はち眠りぬ、彼は其精氣を以て心命を續ぎたるなり。昔しスクロフラと云へる病ありしに、王之に觸れば忽にして療へぬ、王の威光より其病を制せしなり、之によりて一にキングス、イビル、と名けたりき。美なるマリエ、アントイチッテの髮毛暫時にして白なり、千字文の著者一夜にして白髮となりぬ、此等は皆精神か肉躰の上に及ぼす影響なり。夫れ精神すでに、肉躰の上に、如斯き大影響を及ぼすとせば、母の精神氣質は、其肉躰の一部分と云ふべき胎内の子の上に影響せざらんや、實に胎兒の身躰は、母が精神柔質によりて、大に變化するなり。

（二）、ニウヨークの、プロフエッサー、ハンモンド曰く、其都の或る婁、懷胎三ヶ月の時、其人面に傷し流血淋漓たる慘ましき形をもて或夜歸りしかば、かの婁驚倒絕息したり、このとき余は之を診し且つ其後も之を治療したるが、婁は絕へず其兒に何か無れかしと案じたるに、後ち女兒を產むに至り、其面てに黑紅色の斑點ありき而して、其位地、其大宛然彼の其人が顏に傷したるときの狀にてありき」と

（一）、ニウローク\のプロフヘッサー、ダルトン曰く、北都の醫學校の門番の婁或る夜二の耳を失ひたる人の事を夢み甚だ强く之に感動せしが後に子を產むに至り其子の耳一端を欠き宛がら殺ぎたるが如くなりし」と。

（四）、此他同様の及例、甚多し、或女は手掌なき乞食が物を乞へるを見棄て後之を助けざりしとを深痛し遂に手掌なき子を生みたり（プロフエッサー、レ井ス、スミスの說）ルイ十四世の妻マリエ、セレサは、之に仕る黑奴の急に出て衣服に足を

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第十七卷總目錄

自三百一號至三百十九號

社說

孤女學院の近況 六四五

孤女學院設立の告白 六四六

時感五則(勝敗黑白の機)〇諸葛公を想ふ〇勤儉〇心靈貯蓄〇歡喜好男兒多し 六六九

誰か櫻花を挿む者ぞ〇廓并の上に立つ候補者〇地震徇ほ震ふべし〇大教師〇震地傳道隊解隊式〇婦人矯風會 六九三

内閣諸公に最後の一言を呈す 七一七

熊本英學校事件 七四一

國家を愛すとは如何なるとぞ 七六七

熊本英學校事件(再び) 七九三

時事雜評(女子教育今日の趨勢〇當世の閨秀及び名媛〇辭職及び降參〇世人の壽命〇日本古代の研究〇神道維新の檄〇熊本英學校事件(三度び) 八一九

厭戰及び[illegible] 八四五

迎春行(はしがき) 八七一

迎春行◎丹(二)出門(三)伴侶(四)人生行旅の如し(五)學業試驗(六)質問(七)入京 八九五

迎春行◎(八)洛陽城裏喇叭の聲(九)登山を出でゝ流れに浮ぶ(十)一望開豁の地(十一)宗教の感化(十二)移住及び宗教(十三)寄舍(十四)竹(十五)山崎(十六)教會及び教師とは何ものぞ(十七)孤兒院の軍歌(十八)涙鄕の女學 九一九

迎春行◎(十九)先覺と後覺(二十)少年會(廿一)女子の文學(廿二)婦人傳道者(廿三)西洋人(廿四)大坂城(廿五)耕讀園(廿六)湊河(廿七)源平盛衰(廿八)文明、風景を殺す(廿九)近き者は遠し(三十)博愛社(卅一)弗文人(卅二)有年の凶荒(卅三)君子の儒(卅四)王陽明(卅五)自由及び鍛錄 九四三

迎春行◎(卅六)舞界清話(卅七)岡山孤兒院(卅八)孤兒院新講會(卅九)後樂園の鶴(四十)自修餘錄(四十一)山林(四十二)旅中の杞憂(四十三)海邊の寺院(四十四)佛教と邪淫(四十五)賴山陽(四十六)日本外史 九六七

迎春行◎(四十七)山口空洞(四十八)地理と學校(四十九)瓊浦宮の櫻花(五十)平家の官女 九九一

迎春行◎(五十一)鹿嶋鎔造館(五十二)三百年來壽情誼(五十三)暴風の後(五十四)學者優遇(五十五)旅中征人を送る(五十六)山及び老人(五十七)講堂主人を憤ふ(五十八)ゼスイト教の跡(五十九)崎陽の小考古 一〇一五

迎春行◎、(六十)膳嶋の今昔(六十一)聖壽山崇福寺(六十二)書道(六十三)長崎人の誇(六十四)風景と詩人(六十五)ホーム及び女性(六十六)觀察(六十七)井上、稻垣二氏(六十八)加藤清正 一〇一七

迎春行◎(六十九)長崎及熊本(七十)三池炭坑(七十一)開國殖利の着點(七十二)久留米匿娼論、(七十四)都門及九州の青年男女(七十四)百二都城可憐孃(七十五)九州聾音同盟會(七十六)法治人民の精髓(七十七)擧擧後の狂壯士 一〇三九

迎春行(七十八)元寇紀念(七十九)人參畠先生(八十)同胞の愛(八十一)松島城(八十二)漁網(八十三)今治(八十四)古城感謝 一〇六三

宮闕近侍(一)正奸忠賊猶ほ鳥の雌雄の如し(二)天日還射(三)奮公卿諸君(四)方今の大岡越(五)餘情懷備 一〇八七

論說

厭世詩歌と女性(上) 六九六

地震に於ける日本人 七二一

厭世詩歌と女性(下) 七四六

日本改革家の爲めに泣く 七四八

千利休及び茶道を論ず 七九六

小說の實際派を論ず 八二二

我國老ひたる乎 八四八

愛に就きて 八七二

文學上の聯想(上) 九〇三

文學上の聯想(下) 九二六

雜錄

ペーテルを吊す 六四八

マルタとマリア(其中) 六四九

我が亡夫(上) 六五二

女子の設けたる倶樂部 六五四

孤兒院の大父ジョージ、ミラーの報告を讀む 六七六

犯罪に於ける男女の關係 六七七

倫敦に於ける女子の倶樂部 六七八

米國婦人基督教徒禁酒同盟大會に於て決議したる條々 六七九

日本の美術 六八一

詩篇二十三篇(押韻) 六八三

極めて忌はしき疑題 七〇九

羅馬に於ける萬國平和同盟會 七一〇

片々 七一〇

聖歌一首、アルハマ嬉娘(押韻)

上　七三二
アルハマ落城(押韻)下　七五五
學窓片々(タイリアム、ペン坐上の誡○ナポレオンが心中の友　七五八
總撰擧の結果を觀て感を記す(女生四人))　七八一
雛まつり(圖入り)　七八三
近縣の所謂酌婦　八〇七
活ける偶籠(押韻)　八一〇
疱瘡の話(上)　八一〇
妾が貫人ビーチャル氏(一)(幕探さ勤務○家事の手だすけ○花間の逍遙○「自然」のうちに説明なもさむ　八三一
詩篇第四十六篇(押韻)　八三三
疱瘡の話(下)　八三五
京城の朝の雪(其一)　八三七
印度女子改革者スーンテルバイ、メヲー　八五七
京城の朝の雪(其二)　八五九
イーブを懷ふ　八八四
痴想兵衞　八八七
亡き妻　九〇〇
瀛西雜話(其一)デッケンスが其子に與ふるの書　九〇一
劉玄德　九〇二
老子を讀む(上)　九二九
老子を讀む(下)　九五五
詩人ブローニング女史の故家　九五六
松嶋に於て芭蕉翁を讀む　九七三
讃美歌一首(夜中の祈)　九七七
皐月姬　九九九
かいつけぬ(五)　一〇〇二
女子教育に於ける經歷及經驗、第一經歷のあらまし(上)(明治初年に於ける女學の風○櫻井女學校)　一〇二八
女子教育に於ける經歷及經驗、第一經歷のあらまし(下)(北海道に於て○大坂一致女學校)　一〇五一
教育卑見　一〇七二
ローレライ　一〇七三
獨逸婦人の教育(上)　一〇九五

見鑑

白つゆ(上)來た時　七七〇
白つゆ(下)去りし時　八〇一
わが宿の花(第一回)樂しみを苦勞　八七四
わが宿の花(第二回)苦勞は果を結ぶ　九〇六
わが宿の花(第三回)　一〇二三
わが宿の花(第四回、上)　一〇四七
わが宿の花(第四回、下)　一〇六九
わが宿の花(第五回)第二の赤子　一〇九一

隨感

日本國、人物上の趣味　六六〇
理想的教育　六六〇
深夜獨唱　六八四
神の前さ人の前　六八五
德　六八五
故宅　七〇三
熱海の梅園　七三五
婦人は献身者なり　七三六
獨立自治の處世　八九〇
十日の大火　九八〇
武　九八二
人物修養　九九八
一村雨　一〇三四
蓮華草　一〇八〇

家政

育見法(乳母)　九三一
女學生家政餘習に就ての考案　一〇〇四
果實の保存法(いちご○うめ○もゝ)　一〇七四

理學

冬の空氣　六五八
黒インキ造り方　六五八
輿雲輿雨の術　六七五
天氣さ雲の關係　九七九
疼痛さ苦痛　一〇五五

文學

道德上に於けるシェクスピア　六五八
大和の華　六七三
アンクルス、トムス、ケビン　六七四
鴨長明さウオイヅチルス　七五四
元祿時代の韻文並作者自評(上)　八五五
元祿時代の韻文並作者自評(下)　八八〇
落柿舍先生挽歌　九一三
嵐雪が芭蕉の墓に謁でし辭　九一三
百蟲譜　九七八
蓼花巷記　一〇〇二
甌北が李太白を評するの一節　一〇三一
月見賦、附註　一〇七七

小說

蓮華草(上)　八二八
蓮華草(下)　八五三
黒頭巾(第一回)　九一三
黒頭巾(第二回)　九三六
黒頭巾(第三回)　九六二
黒頭巾(第四回)　一〇〇五
黒頭巾(第五回)　一〇三二
黒頭巾(第六回)　一〇五六

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

黑頭巾（第七回）　一〇七五

文藝

日東の裝飾術（其一）　七三三
日東の裝飾術（其二）　七七五
中嶋歌子先生點取、當坐題（寒中鶯）　七七九

史傳

アブラハムリンコンの母　七二三
詩人ミルトンの妻　七五〇
故俳林の二女（一）秋色（二）千代女　八八三
詩人バイロンの母、狂女カセライン　九三二
故辻夫人せん子小傳　九六〇
偉ルーサーの母（上）　一〇五三
偉ルーサーの母（下）　一一〇二

叩扉

ヘンレー、サマーセット女史な訪ふ（肖像圖入）　六五六

批評

國民之友新年附錄（巨人石○懐舊○霜柱）　六六一
小說評註　六六二
油地獄　六六二
英雄經を讀みて　六六三
新嶋先生追懷附錄　六八六
史海の孝謙天皇　六八六
小公子の評　六八七
ベーコン女史著、日本婦女子　七八八
天下の實業家諸君に告ぐ　八一三
回天　八一三
一覽（奇姝錄○慶應義塾出身の衆議院議員○見出　八一三
伽羅枕及び新葉末集（第一）　八三八
思潮白波（神道○細川潤次郎氏○日本基督傳道會社廿四年度收支決算○禁酒せざるを得ざるなり○日本人の氣質○昨年中最良の書　八四二
伽羅枕及び新葉末集（第二）　八六〇
白玉蘭　八六一
經國　八六二
菅原道眞　八六三
孝謙天皇　八六三
人肉質入裁判（磯邊氏譯）　八八九
新世帶　八八九
今深雪　八八九
俊傑少年、俊傑老年　八八九
烈武具　九三八
みだれ咲　九三八
基督教約說　九三八
基督の自然　九三八
道の栞　九三八
友千鳥――四集　九三八
平野次郎　九八二
後の月影　九八三
油地獄を讀む（一）　一〇〇七
靑法大意　一〇〇八
萬世の師　一〇〇八
油地獄を讀む（二）　一〇三六
油地獄を讀む（三）　一〇五八
新刊雜誌○國語漢文講義錄○城南評論○後進○東京評論○おだやか○呼聲○ぱらだいす○朝鮮旬報　一〇三七
浦嶋次郎蓬萊噺　一〇八一
さゝきげん　一〇八一
猿蟹後日譚　一〇八一
人物管見を許す　一〇九八

警告

慨歎すべき二通信（其一）福嶋教會廢娼議決取消の元因（二）私立學校に對する熊本縣知事の命令　七〇七

開書

熊本英學校一教師の告白　七二〇

問答

問答五件（小學校女生徒の簡易なる修身書○婦人會に備へたき書籍○赤十字社出版の看護法○日本人の著述に係る簡易なる心理學及び論理學○愛に苦めらるゝは何故なりや）　七一六
美術の趣味に對する某孃の問に答ふ　七二六
夫婦間義務分擔に關する問に答ふ　七二八
ある乙女、さみしき心の問に答ふ　七五九
女子獻身者ありやなしやの問並に答　八〇五
誤解に對する心　八九一
問答三件（無氣力失望に陷るを防ぐ法○武の八神○扇子の歌）　一〇八六

寄書

明治廿五年の文學界　七一三
愛敵心　七三六
可憐孃　七八八
日本と一大勢力　九八四
正義と愛　一〇八二

時事

審務　六六四
第三期議會を預想す　六六四
辭職す可からず　六六四
白雪漠々に向て大賀同す　六八七
官吏養成　六八七
板垣伯演說中止　六八八
文章今昔　六八八
破戒僧　六八八
文章家と歷史家　六八八
女學校衰微　六八八
葬儀に花を贈るの弊　六八九
選擧に於ける婦人の周旋　六八九
浮浪人　六八九
井上伯　六八九
警告す二疑題　七一一
謀戒令　七一一
筆に愼むべし　七一一
國會離局の由來　七一一
孫落と愛嬌　七一二
政治家の儉約　七一二
小內亂　七一二
文學界　七一二
烏の雌雄　七三七
機一瞬　七三七
聖代名臣錄　七三七
藤原多助　七三七
孤女學院　七三七
新聞紙上戰國策　七三七
傷者何れにある　七六一
勝敗決せり　七六一
議長　七六一
遊說　七六一
第三期議會　七六一
軍人政治　七六一
軍勢を報ぜんか　七六二
深夜傾轉の情　七六二
屍の向ふ所　七八六
黨員の數幾千　七八六
神社にて結婚式　七八六
政の奧殿　七八七
閨秀傳　七八七
條約及改正談案　七八七
院外の團林　七八七
義聚英雄　七八七
家政及國民　七八七
伊藤伯の辭職　八一五
勝伯を慶し且吊す　八一五
副嶋伯　八六五
院外と閣外　八六五
保守風　八六五
無名保守黨　八六五
我國會　八六六
廢娼　八六六
震災地の傳道　八六六

女報

震地傳道既報告あり

孤兒之友

物價

明治二十五年三月十五日遞信省認可
女學雜誌第三百二十八號(甲の卷)附錄
明治二十五年九月廿四日發兌
東京市麹町區下六番町六番地
發行所　女學雜誌社
編輯兼發行人　藤本善治
印刷人　堀口庄三

女學生第二十七號廿二日發兌

社說

不遇の英雄を救助せよ……天　知　子

詩歌の卷

漫筆

隨感錄…………日本の一平民

韓非子の人物……（明治女學校）……ま、ひ、た

家の友

いけ花のすさび

文欄

別れの感謝……（淸流女學校）……伊藤　眞子

開校式のことば（梅香崎女學校）武藤千代子

卯の花を見ろ……（淸流女學校）……梶原　定子

孝なれや……（柳眞女學校）……熱田たま子

文評　（二十三號以下）

理科のはなし

林中淸氣の理、月は出る時果して大か、

木の葉及毒物、人の吐く氣に害なし、

花暦

昔ばなし

何ものゝ隱君子ぞ、大姬、利休水盤の蕣、

信玄と禪僧、見よ地獄の人來れり

わらは遊び、ほゝづき、めかちどち軒の雀、

時の感

夏期號外、文界の近時、田舍翁のことば、

女學生每月一回發兌、一冊價四錢

嚴本善治君編

女學叢書

木村鐙子小傳

定價　金八錢
郵稅　金貳錢

島田三郎君の序に曰（前略）今を距る拾五六年前世人女子敎育を說く者なく婦人も亦中饋の職を以て自ら劃り兒子敎育の要務を擧げて初めより之れ他人に委ぬる者比々皆是なり此時期に當りて婦人敎育の要を覺り唯之を口にせずして之を躬にし自ら學び又其子を敎へて以て家道を肅するに至る是れ既に尋常婦人を以て之を見る可からさるなり特に其夫の遠方に在るに際し孤身能く衰零の家に幹するに至りては最も感ずへし余年十七八田口卯吉君と駿州の鄕校に相知り其后君と前后東京に出てゝ相往來す二人窮する甚くして學資乏絕を告ぐると屢々なりし予君の居に到るに屋傾き壁破れて一見其家道の衰零を知るべし然れ共其待遇の豐厚は君の世計に過ぐるあるを覺ゆ怪みて之を他の友人に語るに亦然りといふ後に至りて其婦鐙子君が田口君の友を待つに意を致すによれるとを知れり予の鐙君を親く知るは實に近年に在りと雖予鐙子君の知遇を得るは實に十年以前に在りて甞て之を知らざりしあり田口君常に言ふ予の成立は姉の助による者多しと此言眞に然り今や田口君世に名ありて家道も亦與れり而して鐙子君は逝きぬ悲ひ哉（中略）鳴呼鐙子君の如きは之を花に比ふるに唯梅の是に當るを得へき乎（下略）

遯堂學人嘗て曰（前略）明治の世にありては老將の戰袍を脫て儒衣を着せし如く戰國未開の習慣を抛て婦人嬌風の主唱となり女子敎育を率先し仔々として惰らず死にいたりて後に止みぬ嗚呼鐙子のごときは亂るゝ世の女丈夫治れる世の淑女とやいはまし此はその古人も最難しとせる所なり況や白梅の雪に包れて其香を愈よゆかしく青柳の風に揉れて其枝の折るる事なき風趣あるかの婦人の貞操苦節は明治女流の師表たるに足ぬべし乞ふ此卷をひもとくもの輕々看過する事なかれ。

東京麴町區下六番町

女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

日本第一等

おしろいいらず化粧用

小瓶 十錢
大瓶 廿錢

白妙 は薄化粧の料として つやある美しき白色をあらわし白粉をぬり附たるがごときき氣味少しもなし

白妙 は化粧下に用ゐて白粉の附き方よくむらにならず又あせをかきてもはげることなし

白妙 を用ゆればいかにあれ性の人にてもあれることなくにきび○あせも○はたけ○すりむき○ひゞあかぎれ○しもやけなど直ちに治すべし

白妙 は人躰のはだをやわらかにしてつやをよくし眞にゐんびなるはだ合さなし色黒き人もしぜんに色白の美人となるべし

白妙 は少しの水にてとかし又は其まゝにて用ゆるもよし

白妙 はもちまへの香氣によりてもろ〳〵の不淨を清むべし

白妙 は醫藥衛生の諸學理とあまたのためしさにもとづき○ワゼリン○リスリン○ラノリン○白色顔料其他いろ〳〵のよき藥を以て製造したる無比の化粧料なれば從來世間にありふれたる化粧下や水白粉ぬり白粉とは大にきゝめあり

白妙 は人躰に無害有効なるは勿論化粧下に用ひて日本白粉のをそる可きごくをふせぎ前記の實効を有する事は近來がいこくの醫士學士等のとつけんせつと又わがたび〳〵のためしさによりてしかとみとむる所なり乞ふおためしの上御ひようばんをたまへ

○元祖色白くなる三能しやぼん　一個　十錢
○あれ性の御方冬は御必用玉子ぬか　一個　一錢五厘
○毛のはへる香油美人かづら　一瓶　金拾錢金廿錢

發賣元　東京市銀座一丁目　艶ふきん本舗　佐々木玄兵衛

牧畜雜誌

第八拾八號目次
九月十日發兌
每月十日廿五日二回發行

○論說

○畜產の話　獸醫學士　西川勝藏

○雜錄

○純粹ホルスタイン種牝牛レディー、デプチユーン號の圖解

○仔豚の飼養○仔狗の看護○乳油製造上甘、酸乳皮の得失如何○滓乳及變性したる牛乳○西報纂譯（○獨逸帝國家畜に於ける結核病の統計○一褥に五犢を擧く○世界中最重最大の馬匹死す○旋毛虫飼養試驗○放線黴症の新療法）○昨年間英國に於けるレグホーン鷄の種類○牛皮輸入に關する注意○牛馬商の起原、沿革、其商業の慣例實況及利害（承前）○但馬七美郡の牧牛狀況○福島縣田村郡牝馬糶市況○秋田縣下二歲駒縣外販賣高○山口縣屠獸數○北米の獸醫學校○鹿兒島縣獸醫養成顛末

○統計

○畜產物輸出入三ヶ月間對照表

○講話

○牧羊の栞（承前）　山陰　牧翁稿

○寄書

○牧畜業は宜しく保護勸奬の政策を取るへし（承前）　東京　松洲生

○鬪鷄の遊戲　東京　迂大生

○問答

○乳牛改良の件に就き質問の答○鷄の去勢術の件に付質問の答○牛の尿を吸飮する件に付質問○泌尿の件に付質問○但馬產牛の件に付き質問○鷄、鵞の老壯鑑別法質問○馬の去勢術に就き質問○山羊に就き質問○牧草の件に付質問

●定價壹冊金七錢●半ヶ年分拾二冊前金七拾五錢●壹ヶ年分（貳拾四冊）前金壹圓四拾錢●外に壹冊に付郵稅金五厘つゝ●爲替は日本橋通爲替取扱所渡りに振込の事

發行所　東京市日本橋區吳服町三拾貳番地　牧畜雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

每土曜日發兌

東京經濟雜誌

第六百四十一號目錄

九月十七日發兌

社說●帝國議會權力擴張策●國民新聞の後進氏に答ふ●近時財政事情(續)●綿糸紡績同業聯合會の規約を讀む **論說**●銀行支店論(文學士土子金四郎) **寄書**●松方伯と明治の理財法(續)文學士阪谷芳郎●商業會議所條例餘論(片桐正雄)●文官試驗規則改正論(四)(替水漁史) **歲計決算**●明治廿一年度歲入歲出總決算比較表(續) **雜報**(數件)◉銀行及商業之景況(數件)◉官令(數件)◉定價一冊金七錢市外郵稅五厘增)

東京市京橋區彌左衛門町七番地

經濟雜誌社

●●新刊書◎◎

松村介石君著

保羅之傳

正價金三拾錢　郵稅金六錢

上製金四拾錢

豫告の書、保羅之傳成る。片紙三百五十。分項六十章。以て其の一大著書なるを知るべし。此の書は啻に偉大なる保羅の心魂如何を知らしむるのみならず、併せて又た保羅の神學をも說き、保羅の書翰をも說明し、基督敎初代なる人傑との對照論をも掲げ、記者が回顧の感慨をも述べ、温故知新の警言を交へ、未信者に對しては眞正基督敎の福音をも示し、兄弟姉妹に對しては活大至純なる道をも演べ、以て大に今日に盡さんと欲する一大願望を以て其全篇を貫かしむ。故に此書を讀まば基督敎の敎理を知り、基督敎初代の歷史をも知り、其當時の人傑をも知り、聖書なる保羅の書翰をも辨へ、信者未信者內外共に益すること莫大なるべし。表紙には鮮美なる保羅の肖像をも掲げ、中には明細なる保羅が傳道地の地圖をも加ふ

發兌　東京新橋出雲町一番地　**警醒社書店**

賣捌　東京下六番町六番地　**女學雜誌社**

北村紫山先生題言　緒方紫洲先生序文
山田天籟先生題言　坂井排雲先生編輯

再版　名家纂評 詩文精華

全壹冊●美製本●正價拾二錢●郵稅不要●郵券代用は二錢切手に限る

本書の價値は諸新聞の批評並に經世新報主筆紫山北村三郎先生の題言に徵して的矣其要旨に曰く雄深なる者は泰山喬岳の如く奔放なる者長江大河の如く流麗なる者は花園錦簇の如く痛快なる者は疾風迅雨の如し詩文精華は天下の奇觀を極むと云ふべし餘は類推すべし世の詩文に志すの士は此の本を購求して朝夕玩味せば韓柳歐蘇を驅馳する蓋し亦難からざるべし

第壹集

月露

正價八錢●郵稅二錢
製本美麗●諸郵券代用

月露第一集は**英傑東湖**藤田先生の佳篇傑作を蒐集したる者にして一讀先生の神采英風奕々として紙上に動き人をして奮勵剛毅の念を發せしむ實に才子必讀の好冊子なり

發賣元　東京下谷西町三番地　**益世館**

大賣捌●神田青柳堂●仝寶山堂●仝巨光堂●仝水陽堂

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

福井

福井

定價一枚壹錢五厘●一ヶ月貳十五錢●三ヶ月六十五錢●廣告料五號活字二十二字詰一行一日分二錢五厘●四號活字一行三錢●二號活字一行四錢●月曜日及大祭日翌日休刊

の用筆は森嚴にして立論は中正なりの報道は迅速にして記事は確實なり

福井 福井 福井 發行所

は官に媚びず民に阿らず正直行々如は正を正とし邪を邪とし言論諤々然の本領は一着眼世に高かき處に在りの特色は一肚皮時に合ざる處に在りは敎育衞生の思想を普及するに力むは農工商業の發起を奬勵するに任ずは斬新にして穠郁なる詩歌を採錄すは豐腴にして典雅なる小說を掲載す

福井縣福井市佐佳枝中町五十一番地

福井社

家庭雜誌

毎月一回　定價五錢

毎月一回(十五日)發兌　初號九月十五日發兌

〔執筆者〕國民之友國民新聞社中主として之に當り、多數の社友之を助くべし、

〔文章〕平明なり、勁直なり、高雅あり、嶄新なり、附するに假名を以てし、讀み易く又解し易からしむ、

〔挿畫〕遒麗なり、意躍り筆飛ぶ、

〔躰裁〕楚々、愛すべし、

〔社說、論說〕警拔の觀察をなし、平直の論評を下す、活々火の如く、灼々花の如し、

〔史談〕今古西東洋の烈女偉士、躍若として淸鮮靈秀なる筆の下に生動すべし、

〔科學〕最も愉快なる方法に由り、最も實用なる物質的新文明の發暢を助長すべし、

〔文藝〕高妙なる小說あり、崇麗なる歌詩あり、音樂繪畫批評詩話文話あり、以て高潔美妙の感想を涵養すべきもの皆あり、

〔家政〕家事經濟、育兒法、衞生談、看病術、調理法、社交一斑、日用品價額、裁縫編物其他婦人職業案內、家內の取締、奴婢の使ひ方、及ひ衣食住に關する諸事を罔羅す、懇切且叮嚀、以て家庭を益すべくして他欄に入らざるすべてを收む、

〔雜錄〕家庭に關し、婦人に關し、少年者に關する內外の時事を報じ、

〔時事一斑〕社會の福音を家庭に傳ふ、

定價表			
一冊	……	前	五錢
六冊	六ヶ月	金	三十錢
十二冊	一ヶ年		五十錢

郵稅	
市外共	五錢五厘
	三十三錢
	五十六錢

廣告料　一引に付　拾錢

發行所　東京京橋區日吉町四番地民友社內　家庭雜誌社

●●廣告●●

山口縣人　遊谷つら

右の者にかゝり名を出て京道し女學雜誌社、孤女學院、愛隣會等に關係ありと吹聽し、又は所々を徘徊し種々なる布說を致し居候得共、毛頭關係無之者に付念の爲此段廣告致置候也

明治廿五年八月

女學雜誌社內　藤井米八郎

横山雅男君著

婚姻論

洋綴中本　二百三拾九頁
特別賣價　金拾六錢
郵便稅　金四錢

目次

第壹章　總論
第二章　婚姻の定則
第三章　婚姻は人類の天性
第四章　婚姻の効力
第五章　婚姻數は社會の盛衰によりて増減す
第六章　早婚上
第七章　早婚中
第八章　早婚下
第九章　晩婚
第十章　私婚上
十一章　私婚下
十二章　血族婚上
十三章　血族婚下
十四章　濫婚上
十五章　濫婚下
十六章　離婚上
十七章　離婚中
十八章　離婚下
十九章　正婚
二拾章　結婚年齢
廿一章　結婚年齢の差
廿二章　男女共諸法上
廿三章　男女共諸法中
廿四章　男女共諸法下
廿五章　男女互に撰ふ事
廿六章　結婚の境界
廿七章　離婚
廿八章　結論

目次終

東京市麴町區下六番町六番地
女學雜誌社

看護婦派出廣告

看護婦入用の節は御依賴に應じ本會より派出致可申候
但し地方へも差出し申候●貧困者は無給の事

東京本所區森川町壹番地
慈善看護婦會

鈴木弘恭大人著

再版
增補

文法口授
一名和文獨案内
（半紙判日本綴）

特別賣價　金拾二錢
郵便稅　金二錢

目錄

（一）文と云もの丶譯
（二）章句段節の譯
（三）文を作るは容易なる譯
（四）多く文を作るを善とする譯
（五）文を作る工夫の事
（六）草稿の譯幷に書方
（七）文を練磨する事
（八）文を作るに病癖ある事
（九）佳篇を作る法
（十）文を培養する法
（十一）種々の文例

東京麴町區下六番町
女學雜誌社

巖本善治編

吾黨之女子教育

小形二百十七ページ
定價郵稅共金拾錢

「吾黨の女子教育」成る。巖本善治君の演述又は起草に係るものを編せしものにして、本校教育の精神、期圖、大率ね之に同じく、現今實施する所ろ亦之に異なるとなければ、此書亦用ひて「吾校の女子教育」を代言するものと謂つべし。故に、と計り、吾校之を版にして、世の同志に示すとす。

全部十五章

明治女學校生徒に告ぐ……一
目下の女子教育法……一
何なか中正の旨義と云ふ……三十
女子教育に關する幾多の謬見……三十
女學及女子教育……五十四
母妻論……六十四
女學に反對する者の肓論……八十
日本女學讀本編纂……九十
外禮と躰操……百十二
上躰操……百
下女禮……百五
女學校の裁縫科……百十二
塾舍に三の法あり……百二十二
武道の辨……百二十七
老母に代つて女學生へ苦情……百五十
細君内助の辨……百五十九
當今女子教育者の胸臆……百九十七
女學普及の經綸……二百〇七

明治女學校出版
女學雜誌社發賣

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

鈴木弘恭大人講述　附錄小倉てびき

第四版 百人一首講義

正價金廿八錢　郵税四錢

御高評を得たる百人一首注文いよ〳〵多く第三版品切に成りたれば茲に第四版を印行す。

發兌元　東京麹町區下六番町六番地　女學雜誌社

女學雜誌大取次所

東京市本町三丁目	瑞穂屋卯三郎
同　錦町二丁目	武藏屋藤藏
同　尾張町二丁目	東海堂
同　彌左衛門町	嚴々堂
同　表神保町	東京堂
同　出雲町	警醒社
同　鐵砲町	指金堂
同　元富士町	盛春堂
同　雉子町	團々社
福岡縣福岡	積善館支店
神奈川縣横濱市	共同新聞發賣會社
同　同	万字堂
京都佛光寺烏丸	東枝律書店
同　新町竹屋町	便利堂
大坂本町四丁目	岡島支店
同	福音社
神戸元町四丁目	福音社
函館市	福音社
熊本縣熊本	草野門平
京都新町二條	大黒屋書店

女學雜誌市內賣捌店

麹町區上六番町	日盛堂
同　三番町	梅仙堂
同	福音舍
同　飯田町	三文字屋
同	洗心堂
神田區神保町	松江堂
同	青柳堂
同　雉子町	大塚書籍店
牛込區神樂町	積善堂
同	正導舍
同　肴町	深田彌兵衛
本郷區眞砂町	文壽堂
同	就本堂
同　富士前町	解明堂
同	盛春堂
同　二丁目	古河屋
下谷區東黒門町	三一堂
神田區松岡町	山口次郎
同　旅籠町一丁目	榎本
同　鍋町	清水嘉兵衛
日本橋區本町三丁目	庭花堂
芝區櫻田本郷町	鈴木新兵衛
同　南佐久間町	栗原
同	鈴木
赤坂區新町	赤川市兵衛
同	飯田
京橋區尾張町	鈴々木
同　出雲町	金盛堂
同	山田屋
本郷區天神町	改進堂
神田區小川町	大塚雜誌店
同　錦町二丁目	貝故堂

其他書籍繪双紙店に於而賣捌く

是迄女學雜誌並に書籍代金弊社巖本善治宛にて爲換御取組御遞送に相成候向きも有之候、右にては帳簿登記上其他に於て不便に御坐候に付何卒以後直に女學雜誌社宛にて爲替御取組御郵送被成下度候

女學雜誌社發送部

一書籍代金二十錢未滿は郵劵代用不苦候、郵劵は五厘切手一割增の事

一雜誌及び書籍代金通運便にて御送付の向は届け賃とも濟にして御送付相成度候

女學雜誌代價

○白赤双方合せ講讀の分

十冊	前金	五十八錢	府外	六拾三錢
廿六冊(半年)	同	一圓四十三錢	同	一圓五十六錢
五十二冊(一年)	同	二圓六十錢	同	二圓八十六錢

○白赤の內一方講讀の分

六冊	前金	三拾五錢	府外	三十八錢
十三冊(半年)	同	七拾三錢	同	七十八錢
廿六冊(一年)	同	一圓三十錢	同	一圓四十三錢

一冊 金六錢　郵税 金五厘

廣告料及無料廣告

一行(廿七字詰)	一回	前金拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

○十行以上一割引。　二十行以上二割引。

○四十行同四割引。

但し不道徳なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く

○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲くるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部 注文を要し以上半頁毎に十部增と定む。

發行所　東京市麹町區下六番町六番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三